
ISに乗りし者達の物語

切裂 刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISに乗りし者達の物語

【Nコード】

N5106U

【作者名】

切裂 刃

【あらすじ】

この小説は「転生物や」主人公最強や「オリジナル主人公などが嫌いな人には」おすすりできません」

そのような小説が駄目な人は「回れ右をしましょう」

注・この作品は文才の無い作者が書いておりますので「その所は」暖かく見てください」

若干タイトル名を変更しました」

第零章 『物語の始まりを告げる者』

風「ん、これで．．．でつきた〜」

書類に何かを書き込んでいるゴスロリの服を着ている少女．．．の用に見える少年がそう告げると、

龍矢「何ができたんだ？」

黒い服を着た長身の青年が聞き、

炎「新しい武装？新しい戦い方のフォーメーション？」

続けて青年より背は低いが体系の良い赤髪の少年が聞くと、

風「ううん、IS学園への編入届け。三人分」

龍矢・炎「なっ！？／何で！？」

とんでもない事をゴスロリを着ている少年は言った。

風「束姉にきょうh．．．頼まれたからだよ」

龍矢「今、脅迫って言おうとしなかったか？」

炎「絶対言おうとした」

風「気にしちや駄目なのです」

これを気にするのは当たり前だと思っのだが、この少年は気にするなと言っていた。

龍矢「で、理由は？」

風「束姉に『いっくんと篝ちゃんとちーちゃんのこと頼んだよ』って言われた〜」

炎「それはどうなんだ．．．」

風「と、言う事で〜さあ行こうかIS学園に行こうか」

龍矢「拒否権は？」

風「束姉が聞いてくれると思うの？」

炎「無理だね」

龍矢「今すぐに行くのか？」

風「うん、だって今日はIS学園の入学式だから」

炎「・・・マジで？」

風「マジで〜」

龍矢・炎「はあ・・・」

そんなこんなで入学が決まった三人だったのだった。

特別章 『キャラ&I S設定』

名前 『黒焰 風』（こくえん ふう）

年齢 16歳

性別 男

誕生日 8月12日

身長 148cm 体重 38kg

容姿 シークレットゲームの姫萩ひめはぎ 咲実さくみの髪の色を紫にして目の色を蒼と黒にしている（普段はカラーコンタクトで蒼にしている）

普段から衣類はゴスロリ等の女性物を着ている（似合っているので問題は無いが．．．）

I SスーツもI Sスーツ用の素材でゴスロリ風にしていて見分けがつかない事が多い

何故かは知らないが頭に動物の耳やお尻に動物の尻尾を模した物を着けている事が良くある

家事が上手く良く部屋で料理をしている 極度のシスコン
仲間を傷つけると本気で切れる

I S設定

名前 『神風』（しんぷう）『????』

初期設定の姿は細くスピードを重視した素早い機体

基本速度が瞬時加速並みだがシールドエネルギーが少ない
基本の色は濃い紫色

機体状態変更機能が付いている

変更出来る状態

『蜃気楼』バーフェクト・サンクチュアリ 『絶対守護領域』

『アルクオン』 『双覇龍』

『????』 『????』

『?????』 『?????』

名前 『黒焰 龍矢』 (こくえん りゅうや)

年齢 18歳

性別 男

誕生日 2月28日

身長 182cm 体重 71kg

容姿 英雄伝説空の軌跡シリーズの剣帝レオンハルトの髪色を黒にして目の色は琥珀色にしている

基本服装は黒色を基調としている物を着用している

ISスーツは上半身と下半身を覆う物に分かれていて上半身には風特性の対G用の鎖を三本巻いてある

基本的に何でもそつなくこなす炎曰く『完璧超人』

基本的に風や炎の事を止める苦労人

IS設定

名前 『黒騎士』 (ブラック・ナイト) 『剣帝』
ソートエンペラー

初期設定の姿はゴツくも細くも無いバランスの採れた機体

性能はバランスが採れていて弱点と言った弱点は無い

機体の色は黒を基調としている

機体状態変更機能が付いている

変更出来る状態

『ヴァイサーガ』 『蒼龍演舞』
そつりゅうえんぶ

『アルトアイゼン・リーゼ』 『切り札』
じょーかー

『?????』 『?????』

名前 黒焰 炎 (こくえん えん)

年齢 15歳

性別 男

誕生日 11月27日

身長 172cm 体重 69kg

容姿 英雄伝説空の軌跡シリーズのアガット・クロスナーの顔の傷を無くしてバンダナを除けただけ

基本服装は赤色の物を着用している

ISスーツは一夏のような物に赤色の物に黒線が入って右手が長くて左手を短くしたものの

基本的に思い込んだら一直線でよく龍矢を困らせている・・・なぜか突っ込む事が多い

仲間等の親しい人が傷つけられると口調が荒々しくなり性格も変わる

IS設定

名前 『烈火』(れつか) 『紅蓮』くれん

初期設定の姿はともゴツい機体

性能はシールドエネルギーは高くパワーも高いがスピードが遅い

機体の色は紅を基調としている

機体状態変更機能が付いている

変更出来る状態

『残月』 『月影』げつえい

『フェアリオン(フェイクライド)』 『幻影舞闘』ファントム・ダンス

『???』 『???』

三機に共通する機体状態変更機能は風が開発した物でその時に合わせて状態を変える事の出来る第五世代機

機体状態変更を解放する事によってその解放した機体にあった感じの武器になる

例・ヴァイサーガⅡ西洋剣と対ビーム用のマント

・残月Ⅱ日本刀一本と小太刀二本

例外・蜃気楼Ⅱガヴェインが使うハドロン砲が撃てるライフル+四機のシールドビット

機体状態変更の解放中にも機体状態変更は可能だがさらに解放する事は出来ない

意味・重ね掛け不可

名前 『黒焰 渚』 (こくえん なぎさ)

年齢 16歳

性別 女

誕生日 8月12日

身長 156cm 体重 秘密 3サイズ 92 - 60 - 88

容姿 シークレットゲームの綺堂 渚そのまま

基本服装は風と同じようにゴスロリが多い

ぽやぽやとしているがこころ一番という時には凄まじい判断力・行動力を見せる

風の双子の姉で風に対しての極度のブラコン

龍矢曰く『この姉にしてこの弟あり』

IS設定

名前 『紫電』 (しでん) 『雷光』
らいこう

初期設定の姿 『白式』の装甲を薄紫色にした様な機体性能???

機体の色は薄紫を基調としている

機体状態変更機能が付いていない

風が作ったISで第三世代機であるが三人とそこそこの戦闘が出来る
風曰く『第三世代最強のIS』

特別章 『採用されなかったNG集（本編第二章までを先に読む事推奨）』

part 1 第一章 『特訓の末に、そして届いた白き騎士』より

一夏「・・・馴染む・・・理解できる、これが何なのか、何のためにあるのか　わかる・・・」

千冬「・・・背中を預けるように、ああそうだ、座る感じでいい、後のシステムが最適化をする」

一夏は白式に体を任せ、白式は一夏を装甲で包み『繋がった』

千冬「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬さんは一夏に大丈夫か聞くと、

一夏「大丈夫だ問題無い。一番良いのを頼む」
炎「ああ」

風「（ピピピ）もしもし〜やっぱり今回も駄目だったよ〜一夏は話を聞かないから〜」

龍矢「・・・なぜ、エル　ヤダイなんだ？」

千冬「（ピクピク）お前ら・・・真面目にせんかつ！！（パシーン！ー！）」

NGの理由

雰囲気こそぐわない為〜却下しました〜

part 2 第一章 『災難』より

一夏「うわあー!!セシリア!退いてくれっ!!」

セシリア「は?つきゃあ!?!」

なんとコントロールに失敗しセシリアの方に向かって行ったが、

龍矢「アインスッ!」

龍矢が掴み、

風「ツヴァイ」

それを風が滅多撃ちして、

炎「ドライ!」

重剣で思いつき吹き飛ばした。

一夏「グフツツツ!!」

そして一夏はアリーナの壁に当たり気絶をしたのだった。

NGの理由

護衛対象をメッタメタにするのはどうかな?と思いましたがの
で却下しました

(本編でもそこそこにポコリましたが...))

part3 第二章 クラス対抗戦 part4 「襲撃 p

art 龍矢・炎」より

炎「...『残月』を完全解放オルバージして『烈火』、単一仕様能力『
紅蓮』を起動...これで決める!!」

そう言つと遙か上空に飛び重剣を構え敵を見下ろしていたが、敵
ISはその隙を逃すまいともう一度ビームエネルギーをチャージし
ていた。

炎「行くぜ！『ロリコンダアアイブ』！！」

龍矢「馬鹿かお前はっ！！」

炎「グハッ！！」

龍矢が『冥王剣』を上手い事炎に当て、炎はそのまま落ちて行くのだった……

NGの理由

……流石にこれは言わなくても解るか？

part 4 第二章 『襲撃の後』より

箒「抜け駆けは禁止したはずだろう！！」

鈴「アンタだって来てるじゃないのよ！！」

セシリア「お二人ともここは病室なのですから落ち着いてください」

一夏「セシリアの言う通りだぞ」

渚「……一夏君、鈍感なんだね」

何故か修羅場っていた。

炎「何この混沌^{カオス}？」

龍矢「話の内容からすると、大方鳳と篠ノ之が協定を結んだがそれを破っただけだろう」

風「……少し、頭冷やそうか？」

鈴・箒『（ブルッ……）「う、後ろを向いてはいけない」』

風「ふふふっ……さあアリーナに模擬戦しに逝こうか？」

鈴・箒『字が違うわよ／違うぞ！！』』

それを見ていたもの達の反応は・・・

炎「ドンマイだね、二人とも・・・」

龍矢「あれは俺たちでも勝てないからな・・・」

渚「久しぶりに見たよ」・・・」

一夏「（風は怒らせない様にしよう・・・）」

千冬「（この私が冷や汗をかくとは・・・）」

セシリア「（絶対に風さんは怒らせない様にしましょう・・・）」

そして次の日、第三アリーナには真っ白になった筈と鈴の姿があったとかなかったとか・・・

NGの理由

風が某管理局の魔法 女風にお仕置きをして〜キャラ崩壊が起き
そうになったからです

特別章 『採用されなかったNG集（本編第二章までを先に読む事推奨）』（後

またいづれこんな事をするかもしれません）

第一章 『編入試験』

風「ここがIS学園か」

龍矢「のようだな」

なぜか約一名の頭にはうさミミが着いている少年たちの前には、かなり巨大な建物が建っていた。

炎「早く事務室目指そうよ」

？「その心配は無いぞ、お前達」

後ろから凜々しい声が聞こえて来たのでその方向を向くと、一人の女性が立っていた。

千冬「私の名前は織斑 千冬この教員をしている」

龍矢「初めまして、俺は黒焔 龍矢だ」

炎「黒焔 炎です」

風「僕は黒焔 風って言います。束姉の言う『ちーちゃん』さんで合ってますか？」

千冬「その名で呼ぶな。それよりもお前達が転入生で間違いないのか？」

龍矢「間違いないですよ、織斑教諭」

千冬「なら、試験会場へ移動するぞ、時間はあまりないからな」

移動中、

千冬「ここで試験を行う、ちなみに聞くがこの中で一番弱いのは誰だ？」

風「僕だね」

龍矢「風だ」

炎「風だね、昨日やつと整備が終わったて言ってたし」

千冬「なら、お前が試験を受ける」

風「この中で一番弱い奴の成績によって僕らも入れるのか決めるんだ」

千冬「すまないな、時間がないのでこういう事になったんだ」

龍矢「急がしい所をすみません」

千冬「仕方がない、これも教師の仕事なのでな」

炎「誰が相手するんすか？」

千冬「それは、彼女だ」

千冬が見ている方向には胸の大きな女性がISを装備して立っていた。

風「練習の女王、山田 真耶さん・・・ですよね？」

千冬「その名は彼女のの前では言つてやるなよ」

風「解つてますよ・・・じゃあIS展開、行くよ『神風』」

ISを展開するとそこには薄紫色のIS装甲を纏っている風の姿だった。

真耶「準備は良いですか？」

風「(ん)・・・まだ武器は出さなくていいや(せんせ)いいですよ」

千冬「なら・・・始めっ!!」

声と同時に風は一枚のカードを取り出した。

風「行くよ、『塵気楼』をスロット!!そしてそのまま解放^{パージ}」

その声と同時に一瞬『神風』が黒い機体になったがその機体がのき、一丁のライフルと、周りに浮くビットとなった。

千冬・真耶「なっ!?!/えっ!?!」

その行動をみて驚いている二人だが、

風「行け、ハドロ砲発射」

真耶「えっ？きゃ、きゃあ~~~~！？」

その隙にさっさと砲撃を発射した風の一撃によって、シールドエネ
ルギーは零となった。

風「勝った」

勝ちを喜んでいる者と、啞然としている者、普段のような状態
でいる者の三つの状態になって、この試験は終了した。

気絶をしている山田先生を保健室へ連れて行って、別室にいた三人
に千冬さんは聞きたい事があった。

千冬「おい、今のは何をしたんだ？」

風「うーん、僕たちのISは企業秘密なんだけどな、どうしよう」

炎「この人なら大丈夫だと思うよ？」

龍矢「同感だ、織斑教諭、このISは467のコアの内のどれにも
含まれず、新しい三つのコアの468〜470番目のコアなんだ」

千冬「なっ!？」

風「僕が作って、束姉に見せたら、OK貰ったんだ」

千冬「.....」

千冬「.....」

千冬はその事を聞いて啞然としていた。

龍矢「それよりも俺たちは入学すると考えていていいのか？」

千冬「あ、ああその事は大丈夫だ.....」

龍矢「なら、それ以外の事も話しておこう」

千冬「ありがたい、それは助かるのでな.....」

龍矢たちは、自分たちのISの性能やIS学園に来た理由を話した。

龍矢「.....と、言う訳だ」

千冬「ならば、お前達は私や一夏の味方と考えていいのか？」

炎「良いんじゃないか？東姉の言葉には逆らえないしね」

龍矢「そう言う言い方をするな、俺たちは味方だと考えてくれて問題ないと思ってくれ」

風「うん、東姉には、いっぱい助けてもらったからね、その友人さんも、その弟さんも、しっかり守るよ」

千冬「・・・その言葉、本当だな」

三人「うん／ああ／まあね」

千冬「ならば、その言葉を信じさせてもらおう。

そして、ようこそ、ISS学園へ」

第一章 『編入試験』（後書き）

三人のISの情報は、また今度、IS設定を載せる時を、楽しみにして頂けたらなと、思います。（本編で出るかもだけど）

感想や意見等も、お待ちしております。

第一章 『入学』

編入試験後の一日、世間のニュースに三人のことが発表されたのだが、その見出しは、

『織斑 一夏に次ぐ新たな男性IS操縦者が三人！？だが一人は女性にしか見えない！？』だった。

その見出しに特に気にした様子もなく平然としている風、龍矢、炎の姿がIS学園の千冬先生の受け持つクラスの『1-1』の前に立っていた。

千冬「私が呼んだら入ってこい」

風「りよ〜かい〜」

炎「了解です」

龍矢「了承した」

三人がそう言うと千冬先生は教室へ入って行った。

少しすると、中から『パシーン！！』とすごくいい音が聞こえて来て、

炎「何の音だろうな？」

龍矢「解らん」

風「・・・千冬先生が出席簿で誰かを叩いたみたい」

龍矢「・・・あんなに良い音が出るんだな」

そんな事を言っていると、

千冬「今日は転校生を紹介する・・・まあ朝のニュースで知っている者もいるかもしれないがな。入って来い」

風「呼ばれたね〜」

龍矢「行くぞ」

炎「はいはい」

一夏 side

今日のHRで千冬姉が入って来たときに間違えて、「千冬姉」と言ったら、

千冬「織斑先生だ、馬鹿者」

と言われて出席簿（凶器）で叩かれた。

「理不尽だ・・・」と心の中で呟いていると、千冬姉が、

千冬「今日は転校生を紹介する・・・まあ朝のニュースで知っている者もいるかもしれないがな。入って来い」

と言っていたので入り口を見ると、三人の人が入って来た。

一人目は長身で黒髪碧眼の男性、

二人目は赤髪赤目の体系の良い男子、

三人目は・・・なぜか束さんみたいにうさミミをつけているゴスロリを着ている少女だった。

思わず「なぜ制服じゃなくてゴスロリ？」と呟いた俺は悪くないはずだ。

そして千冬姉は驚くべきことを言った。

千冬「この三人は一人は女の用だが、全員男だからな」

この言葉には俺だけでなくクラス全員が固まり、数秒後に

『ええええええええええええ！？』

と叫んでしまっていた。

side out

風「きゅっっ」

龍矢「くっ」

炎「うわっ」

クラスの皆が叫んだ時に風はその音量に目を回し、龍矢は怯み、炎は若干引いていた。

そしてクラスメイトから

「あの子が男子！？下手な女子より可愛いわよ！？」

「それよりも男子よ、男子！！しかも三人！」

「織斑君と違って頼りになりそうな男子が二人に癒し系の男子が一人！！」

「ああこのクラスでよかった！！」

等々の声が聞こえて来た。

千冬「（パンパン！）お前達、静かにしろ！！」

そう言うところクラスが静かになった。

千冬「それではお前達、自己紹介をしる」

龍矢「了解した、俺の名前は黒焰 龍矢、この二人の兄だ。趣味は特に無い、以上だ」

炎「俺は黒焰 炎、この兄弟の一番下だ、好きな言葉は『全力全開』だな。そんな感じかな？以上で」

風「僕は黒焰 風で、気軽にふーちゃんや、ふー君って呼んでくれたら良いよ」

千冬「という事だ、お前達の席はあそこだ」

そう言っただけで場所はクラスの端の方だった。

千冬「今日のHRは以上だ、しっかりと勉強に励め。それと三人はその後部屋の鍵を取りに来い」

そう言い終わると同時にチャイムが鳴り三人は千冬先生の所へ部屋の鍵を取りに行った。

部屋の番号を見ると炎と龍矢は同室で、風は一人部屋だった。

鍵を貰ってから席に戻ると、

「ねえねえ三人は彼女とかいるの？」やら、

「三人はどこ出身？」やら、

「なんで入学式の次の日に来たの？」やらの質問攻めを食らっていた。

そんな中一夏は、どうにかその中に入り三人に、

一夏「俺は織斑　一夏、この学園での男子は俺たちだけだからよろしくな」

と、しつかりと挨拶をし、

龍矢「ああ、よろしく頼む」

炎「まあ、よろしくね」

風「ん〜、よろしく〜（束姉のに見せてもらった写真通りだね〜）」
と、挨拶を交わしていたのだった。

第一章 『エンカウント 前編』

授業はほとんど知っている事ばかりだったが、一夏は全く知らない事だけだったようで、織斑先生に出席簿で頭を叩かれていた。

そんな中、風達は何事も無く一時間目の授業を終えたのだが・・・
セシリア「ちよつとよろしくて？」

龍矢「なんだ？」

セシリア「まあ！やはりこの国にはまともな男性はいないようですわね！」

龍矢「それよりも用件も言わず、名を名乗る事もせず、一方的に人の祖国を馬鹿にするほどの馬鹿がいる事に驚いたがな」

セシリア「な、何ですって〜！！」

炎「とりあえず放つとこ、邪魔だし」

セシリア「こんな無礼な仕打ちを受けた事ありませんわ！！名を名乗りなさい！！」

炎「自分の名を名乗らない奴に名乗る名前なんてないよ」

龍矢「そうだな」

風「くう〜」

セシリア「むきい〜！！私の名前はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ！！」

炎「俺は黒焰 炎だよ」

龍矢「俺は黒焰 龍矢だ。で、何のようだ？」

セシリア「男のIS操縦者が増えたからどんな男かを見に来たら、とんでもない方ばかりですね」

龍矢「それで？」

セシリア「どういう事ですか？」

龍矢「用事がそれだけなら消える、邪魔だ」

炎「まあ、人が会話している中に関係ない話だけ持って来て中断させてるんだから、邪魔なんだよね」

セシリア「なっ．．．．．!!」

龍矢「炎、こんな大剣を考えているんだが．．．」

炎「ああ．．．でもこの大きさだと俺のIS位じゃないと使えないね」

龍矢「まあ．．．一番武装の少ないお前用だな」

セシリア「は、話はまだ終わってなくてよ!!」

風「んゝ、うるしやいゝ」

こんな会話が頭の上で行われているのにも関わらずに寝る風は凄いのか鈍いのだろうか．．．

キーンコーンカーンコーン

そんな時に授業開始のチャイムが鳴った。

千冬「お前達、席に着け」

セシリア「くっ．．．．．、話はまた後で。逃げないことね!よくつて!?!」

龍矢「もう来るな」

炎「こっちはISの新装備考えてるんだよ」

その言葉に織斑先生と山田先生以外の者は、『はっ?』と声を揃えていた。

千冬「その事は隠さなくていいのか?」

龍矢「作るのは風ですし．．．それに」

千冬「それに?」

龍矢「こいつは束さんみたいに気に入った奴にしか武器はともかくISの整備すらしません」

千冬「こいつがか?」

千冬は、未だに寝ている風を指差しながら言った。

龍矢「はい」

千冬「そうか（パシーン！）」

風「ふみゃ！？」

千冬「授業は始まつとるぞ、馬鹿者」

風「ううゝ、すみません・・・」

そして授業が始まろうとした時に、

セシリア「その方がISの武器等を作れるというのですか！？」

そんなクラス全員の言葉を代弁したように叫ぶセシリアがいたのだ
った。

第一章 『エンカウント 後編』

セシリア「その方がISの武器等を作れるというのですか!？」
龍矢「だからどうした？」

セシリア「こ、この方はそこまで頭が良く無さそうなので本当に作れるのが疑問なだけですわ!!」

風「・・・誰が頭が良く無さそうだったって？」
セシリア「それはあなたですわ!!」

風「織斑先生・・・この子、本気で潰していいですか？」

千冬「やめておけ、後で外交問題に発展する」

風「大丈夫です、その国家ごと消すので」

龍矢「そこまでだ、風」

風「何、龍矢？」

龍矢「こいつは俺が叩きのめす・・・お前の事をここまで言われたから腹が立っているんだ」

炎「まあ、潰したいけどここは龍兄に譲ろうか」

龍矢「決まりだな、織斑教諭」

千冬「何だ？」

龍矢「今日の放課後にアリーナの使用許可を貰いたい、こいつを潰すためにな」

千冬「(・・・こいつのISも見れる事だ) 良いだろう、ならば放課後の三時半に第三アリーナに来い。オルコットも一緒にな」

セシリア「解りましたわ、ハンデは要りませんか？」

龍矢「ならば質問だ、第二形態への移行は完了しているのか？」

セシリア「そ、それはまだですわ」

龍矢「なら、俺はハンデとして第一形態の状態だけで戦おう」

セシリア「なっ!？」

セシリアはハンデを与えるどころか、ハンデを逆に貰い激怒していた。

セシリア「いいですよ！！あなたはこの私、セシリア・オルコットが叩きのめしてあげますわ！！」

龍矢「ああそうだ、俺にはダメージを一度与えただけで勝利という事で構いませので、織斑教諭」

クラス全員（一部を除く）『なっ！！！！』

千冬「そうか、ならこの話はここで終わりだ、これより授業を開始する」

そして時間は飛び、放課後になるのだった・・・

第一章 『龍矢VSセシリア』（前書き）

三話連続投稿なり！

第一章 『龍矢vsセシリア』

セシリアと戦う事になったその日の放課後、

龍矢のピットには龍矢、風、炎、千冬と何故か一夏の姿があった。

一夏「本当に大丈夫なのか、龍矢？」

龍矢「何の事だ？」

一夏「ダメージを一度でも食らったら負けっただよ」

龍矢「ああ、その事か．．．俺は今までな風と、炎に以外、ダメー

ジを受けた事が無いからな」

一夏「本当か!？」

龍矢「嘘についてどうする．．．フム、そろそろ時間か．．．行く

ぞ『ブラック・ナイト黒騎士』!！」

龍矢は自らのISを展開した。

展開したその姿は、無駄な装甲は一つもない．．．まさに騎士のよ
うな姿だった。

龍矢「さあ行くぞ、目の前の敵は叩き潰すまでだ!！」

セシリア「ちゃんと逃げずに来たみたいですね」

龍矢「そちらこそな」

セシリア「ああそうですね、この勝負に私が勝ったらあなたを奴隷

にして差し上げますわ」

龍矢「負ける事などあり得ないのでな．．．さあ、始めようか．．．

そうして勝負が始まった。

龍矢「行くぞ、『ヴァイサーガ』をスロット!！」

そう言つて龍矢がカードのような者をカードリーダーのような所に
刺すと黒い騎士の姿から蒼く、マントを纏った騎士のような姿にな

った。

セシリア「なっ!?!」

セシリアはその事に驚いていたが、龍矢はその隙を逃さずに、

龍矢「...単一仕様能力『蒼龍演舞』」

龍矢がそう呟くと同時に『ヴァイサーガ』の周りに青い粒子が漂い始めた。

セシリア「姿は変わってもこれで終わりですわっ!?!」

セシリアはそう言うと言に握っていた『スターライトmk?』の引き金を引き、その弾が『ヴァイサーガ』に被弾した...ように見えだが、

龍矢「...」

龍矢のシールドエネルギーは減っておらず、それどころか回復をしていたのだった。

セシリア「な、なぜシールドエネルギーが減っていないんですの!?!」

龍矢「そんな事、自分で考える」

その言葉と同時に『ヴァイサーガ』の姿が瞬時加速によって消えたように見え、

龍矢「...これで幕引きだ、『光刃閃』!!」

龍矢が持っていた刀を抜き、何閃もの太刀筋が見えたと思うと、その攻撃だけで『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーは零になっっていた。

そうしてこの勝負は龍矢の勝ちに終わったのだった。

そして次の日にはセシリアが風達に謝り、いつの間にか仲良くなっていたのだった。

第一章 『訓練の約束』（前書き）

と〜じよ〜を忘れていた〜、ほ〜きちやんのと〜じよ〜
ほ〜きちやんのフアンの人は〜すみません〜 orz

第一章 『訓練の約束』

一夏「龍矢、俺を鍛えてくれ!!」

龍矢「何なんだ、いきなり・・・」

風「いきなりだ」

風達が登校して来て席に荷物を置こうとしたら、いきなり一夏がこんな事を言い出して来た。

炎「一夏、とりあえず理由を言おうな」

一夏「実は・・・」

省略すると、龍矢とセシリアが戦った前日にクラスの代表を決める事になっていて、一夏が立候補させられたらしい、だがセシリアは一夏が代表になる事が気に食わず結果的に一週間後に戦いをする事になったらしい。

龍矢「・・・理由は解ったが、却下だ」

一夏「何で!?!」

龍矢「なら、お前はアリーナの使用許可や、訓練機の貸し出しの為の書類等は提出してあるのか?」

一夏「ぐっ・・・」

龍矢「それに俺は慣れていないからと言って手加減等できんぞ?」

一夏「・・・」

龍矢の言った事を全くしていなかった為何も言えない一夏だったが龍矢の理由を聞いた瞬間絶句した・・・

風「ん、訓練用のISなら一機有るよ、アリーナの許可も取ってあるし」

龍矢「一夏『・・・は?』」

風「だ、か、ら、訓練用のISならあるの」

龍矢「何故持っている・・・」

風「束姉からISのコアを一つ貰っててそれを改造してたから

」

一夏「え、えっ？」

炎「またやってるの？」

風「ん、暇だったからね、近接特化型のIS作ってたのだ。だから炎、一夏の相手よろしくね。」

炎「やつぱか。」

そんな事を言いながら半分諦めに入る炎だった。 . . . とそこに

篝「すまない、一夏に話が有るのだが . . . 」

風達の知らない女子が話しかけて来た

一夏「ん、ああ篝どうかしたのか？皆紹介しとくよ幼なじみの篝だ」

篝「篠ノ之 篝だ」

龍矢「龍矢だ、よろしく頼む」

炎「炎だよ、よろ。」

風「ほき、ほき？ . . . あ、思い出した、束姉の妹さんか。」

篝「姉を知っているのですか！？」

風「ん、知ってるよ、だって少し前まで一緒に居たんだもん。」

龍矢「まあ、知っているのは風位だな」

篝「そうですね . . . 」

風「そ、言えば、篝ちゃんにこう言つといて。」って伝言だよ

『篝ちゃん元気、天才な君の姉束ちゃんだよ、また今度会いに行く

からね。』だって。」

篝「姉さん . . . 」

そう言いながら頭に手を当ててため息を吐いている篝と、その姿を見て苦笑している一夏の姿が印象的だった。

篝「それよりも . . . 一夏を借りてもよいでしょうか？」

龍矢「別にいいぞ」

炎「話し終わつたから別にいいよ」

篝「ありがとうございます、行くぞ一夏」

一夏「篝、引つ張らないでくれ、って！風も俺に乗らないでくれ！」

そんな姿を見て、

龍矢「哀れだな・・・」

炎「哀れだね・・・」

そんな言葉が無意識に出ていた龍矢と炎だった・・・

第一章 『訓練前編』

風「と、言う訳で～早速始めようか」

炎・一夏『拉致つて何が早速なんだ．．．』

放課後になると同時に風に連れ去られ、第三アリーナに拉致られた二人の心境は同じだったようだ。

風「あれ～？特訓するんじゃないの～？」

炎「．．．忘れてた」

一夏「それは頼んでたけど．．．いきなり拉致るのってどうなんだよ．．．」

特訓の事を忘れていた炎と、覚えていたが拉致られた事に不満を持つ一夏だったが、

風「炎は忘れてると思ったし～一夏はあのままだと来るのが遅くなるか～来ない気がして～」

．．．実は教室を出る前のHRの時間に一夏は女子達に囲まれていて、放課後も囲まれると予想した風が連れ去ったのだった。

一夏「．．．．．．（プイッ）」

風「何で目をそらすのかな」

一夏「すみませんでした．．．」

風「解ればよろし」

風「さあ～始めようか、一夏はこれ装着してね」

一夏「．．．何、これ？」

風が一夏を乗せようとした訓練機は全身が薄紫色で龍矢の黒騎士をブラック・ナイト思わせる．．．と言うよりも黒騎士を薄紫色にしただけの機体だった。

風「ちなみに武器は～日本刀を模した刀一本だから」

一夏「なんで！？銃とかは!？」

風「一夏には肉体強化もかねて〜これ一本で訓練してもらいます〜」

一夏「嘘だろ．．．」

炎「風は基本冗談言わないから、諦めなよ一夏」

風「ちなみに〜炎も使っていないのは剣だけね〜」

炎「最初からそのつもりだって、行くぞ『烈火』」

炎がISを纏うと全身赤のかなりゴツイ、見ただけでパワータイプだと予想の着く機体だった。

一夏「．．．凄いな、それ」

炎「凄いのは見た目だけじゃないけどな、早く乗れよ、一夏」

一夏「ああ．．．」

そう言つと一夏はその機体（風曰く、名を『紫電』と言つ）に乗り込んだ。

風「まずは〜やっぱり飛んでみようか〜」

炎「飛ぶ事が出来なければ簡単に負けるからだね」

一夏「どうやって飛ぶんだ？」

風「まあ、イメージかな〜、自分に羽が生えて〜空を飛んでる感じかな〜？」

炎「それが、もう無理矢理飛んで慣れる位だね」

一夏「そうか．．．」

一夏は自分に羽が生えたのを想像しようとするが．．．

一夏「全く想像できない．．．」

風「じゃあね〜鳥が飛んでるのでいいと思うよ〜」

今度は上手くいったようだが、風に「想像力を着けようね〜」と笑いながら言われていた。

風「じゃあ〜このアリーナを五分以内に何週回れるか試そうか〜」

一夏「マジかよ．．．」

炎「一夏ドンマイ」

風「ちなみに炎もね〜」

炎「何でっ!？」

風「二人とも僕が思っている以上に少なかつたらしく、．．．練習メニュー倍ね」

一夏「頑張ろうか、炎！」

炎「ああ、そうだな一夏！」

練習メニュー倍と聞いた瞬間に急にやる気を出した二人だった。

風曰く、「練習メニュー倍って魔法の言葉だよね」との事だった。

．．．ちなみに練習メニューはなんとか倍にならなかつたらしい。

．だが、

風「じゃあ少し休んだら最初に考えてた模擬戦ね」

この言葉に炎と一夏はため息をつく事しかできなかつた。

ちなみにその頃の龍矢は．．．

龍矢「くっ．．．一夏め、後で覚えている．．．!」

一夏の代わりに教室で女子達に囲まれていたのだった。

第一章 『訓練後編』 (前書き)

ほぐきちゃん誕生日おめでと〜!!

第一章 『訓練後編』

風「さて、お待ちかねの模擬戦だよ」

一夏「マジでやるのか・・・」

炎「当たり前だろ」

風「炎は刀だけの『残月』でお願いね」

炎「はいはい・・・さあ、行こうか『残月』」

そう言うと炎の『烈火』の色は紅から黒に変わり烈火に比べるとスマートになった機体になった。

一夏「これ見るの二回目だけどマジでどうなってんだ？」

風「それは禁則事項なのだ」

一夏「だろうな」

炎「御託はいいから始めるぞ一夏」

一夏「そうだな」

そう言うと一夏と炎は飛び上がり戦いの為に構えるのだった。

炎「来い、『暁丸』」

一夏「行くぜ、『雷切』」

そう言うと二人の元に色は違いが同じような形、長さの日本刀が現れた。

風「じゃあ勝負開始」

間の抜けた声によって一夏と炎の勝負が始まった。

炎「まずは・・・月光一閃斬！！」

その声と同時に剣を振り下ろし、衝撃波を発生させ攻撃したが、

一夏「食らったっ！」

その場を飛び上がって回避をし、

一夏「食らえっ！」

そう言うと、炎に向かって剣を振り下ろし切り掛かった一夏だが、

炎「甘い、『秘剣・闇夜切り』」

切り掛かって来た一夏の剣を止め、一夏を蹴り上げた後に炎は一夏を一閃した。

一夏「うわっ！」

炎「避けないと危ないぞ？『暗黒剣×の字切り』」

一夏「なっ！？ぐあっ！！」

その言葉の通り避ける事のできなかった一夏は、その斬撃を食らってしまいシールドエネルギーがほとんど削られてしまった。

炎「これで終わりか、一夏？」

一夏「まだだ．．．まだやれる！！」

炎「いい気迫だ．．．なっ！？」

一夏が叫ぶと同時に『紫電』が雷を纏い始め、炎はそれに驚いていた。

一夏「これは？」

一夏が咳くと目の前にモニターが現れモニターにはこう書かれていた。

炎「単一仕様能力『雷光』．．．」

炎のモニターにも同じ事が書かれておりそう呟いたが、

炎「面白いな一夏、ここで無意識のうちに単一仕様能力の起動か．．．」

一夏「そうみたいだな．．．」

炎「だが、ほぼ負けが確定している．．．さあ、どうする一夏？」

一夏「決まってるだろ？負けが確定なら諦めたかもしれない．．．だけどまだ勝ち目は有るんだ、とことんやってやるさ！」

炎「そう言うと思ってたさ．．．止めだ！！」

一夏「食らえっ！！」

炎「『大次元断』！！」

一夏「『ライトニング・スラッシュ』！！」

そう言うと同時に一夏の刀は雷を纏い巨大な剣へ、炎は刀を上段に構えそれを振り下ろす事によって次元をも切り裂きそうな巨大な刃

を作り出し、それが激突をした。

一夏「切り裂けっ!」

炎「断ち切れっ!」

その技は少しの間拮抗したが、その勝負に勝ったのは一夏だったが、風「そこまで、一夏のシールドエネルギーが零になったから、炎の勝利!」

一夏のシールドエネルギーが零になり、この勝負は炎の勝ちで終わったのだった・・・

その試合の後、

炎「風兄、なんであんなの組み込んだのさ・・・」

風「あんなのつて?」

炎「なんで単一使用能力使えるように設定してるのさ!」

風「・・・解除するの忘れてた」

一夏「なあ、風って本当に大丈夫なのか?」

炎「仕方ないよ・・・天然で何度も大切な事を忘れてたから」

風「えっへん!!」

炎・一夏『威張るなっ!!』

そんなこんなで一夏と炎の模擬戦は幕を閉じたのだった・・・
次の日の朝、一夏が龍矢に殴られたのは、また別の話であった・・・

第一章 『訓練後編』（後書き）

やっぱり戦闘描写が短くなるな

色々書いてたら長くなるし、逆に何もしないと短いし、分配が大変だよ（涙）

ちなみに炎の技は、魔界戦記ディスプレイシリーズの技を使っています

第一章 『特訓の末に、そして届いた白き騎士』

一夏との訓練はセシリアとの勝負までずっと続いたのではなく、最初の日の模擬戦の後にこんな会話が合った、

風「一夏の馬鹿〜!!」

一夏「何!? 何で怒られるの!?!」

一夏が乗っていた『紫電』の調整を行っていた風が何の脈絡も無く切れた。

風「せつかく作った『紫電』の武器の『雷切』が壊れてるのーーー!!」

一夏「えっ!?! 何でっ!?!」

炎「そりゃあ俺の『大次元断』に突っ込んで来たからでしょ．．．」
風「他にも内部パーツが壊れてるんだよ〜!!」

一夏「ご、ごめん!! 俺が悪かったのは解ったから!!」

風「ぐすん．．．解ったよ．．．でも、少しの間は乗れないからね．．．」

一夏「ああ、それは解ってる」

炎「なら訓練は一時中断だな」

一夏「やっぱそうなるのか．．．」

そんな事になってしまい、これから先の日程の練習をどうしようかと一夏は困っていたが、そんな時に、

箒「く、訓練ができないなら、私が稽古をつけてやるつか、一夏?」

一夏「箒? 稽古って何の稽古だ?」

箒「な、何って剣道のだ」

炎「そうだな．．．基礎体力などを着けるにも運動が一番だしな」

風「それに動体視力も上がるしね〜（それに束姉が『いつくんの機体は近接型で行くよ〜』とか言ってたしね〜）」

一夏「箒は時間とかは大丈夫なのか?」

第「だ、大丈夫だから誘っているんだ」

一夏「なら頼むよ」

第「う、うむ！承知したぞ一夏！」

そんな事があの後にあつたのだった。

だがその後に風は、「いつから居たんだろうね」と言っていた。

そして、セシリアとの勝負の日に一夏の専用機が届く事になつていたのだが……

一夏「……来ないな」

炎「……来ないみたいだね」

風「来ないね」

勝負の前になつても届いていないのだった。

一夏「この場合……どうすれば良いんだ？」

風「さあね」

炎「待てば良いって」

そんな会話を繰り返しながら待つっていると、

真耶「織斑君、織斑君！！届きましたよ！織斑君専用のISが！」
「！」

一夏「やっと来たみたいだね」

風「そ〜みたいだね」

炎「どんなIS何だろうな、一夏？」

一夏「さあな、見てからのお楽しみみたいだね」

そう言いながらISの搬入口を見ると、純白の、真っ白な、と言う言葉で表せるような白さを持った機体がそこにあつたのだった。

千冬「織斑、体を動かせ、すぐに装着しろ。時間がないからフォー

マットとフィッティングは実戦でやれ、できなければ負けるだけだ、
わかったな」

そういわれ、一夏は白式に触れたが・・・

一夏「あれ・・・？」

篤「どうかしたのか？」

そう言っただけで周りを不安にさせたかと思つと、

一夏「・・・馴染む・・・理解できる、これが何なのか、何のため
にあるのか　　わかる・・・」

千冬「・・・背中を預けるように、ああそつだ、座る感じでいい、
後のシステムが最適化をする」

一夏は白式に体を任せ、白式は一夏を装甲で包み『繋がった』

千冬「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気
分は悪くないか？」

千冬さんは一夏に大丈夫か聞くと、

一夏「大丈夫、千冬姉、いける」

千冬「そつか」

と言っている一夏の姿があった。

第一章 『特訓の末に、そして届いた白き騎士』（後書き）

次回は『一夏vsセシリア』の予定でお送りします〜

感想等〜改善点が有りましたら〜報告して頂けると幸いです〜

．．．願望としては〜感想が欲しいですけどね〜

第一章 『一夏vsセシリア』

篝「一夏は勝てると思うか？」

炎「運だね、確実に」

風「フォーマットとフィッティングが済んでたら、30%位だからね」

千冬「．．．そこまで低いのか、風？」

風「まあ、一度だけどISは動かしてあるし、あの機体で単一仕様能力を使つてますからね、これでも高い方ですよ？」

千冬「．．．そうか」

篝「一夏．．．」

一夏 side

一夏「（この前乗せてもらった『紫電』に比べると少し動きが鈍いな．．．）」

それが一夏が『白式』で最初に飛び立った時の感想だった。

一夏「まあ、考えても仕方ないか」

そんな事を呟いていると、

セシリア「あら、逃げずに来ましたのね」

一夏「逃げてよかったのか？」

セシリア「そんな事許す訳無いじゃ有りませんの」

一夏「なら聞かない方が良いんじゃないのか？」

セシリア「．．．いちいち、むかつく方ですわね」

一夏「そんなつもりは無いんだけどな」

セシリア「まあ良いですわ、今なら最後のチャンスをおあげますわよ？」

一夏「え？なんかいつたか？」

セシリア「な！??? チャンスを上げようと思いましたが、やめで

すわ！」

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。
セーフティのロック解除を確認。
敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

一夏「あれっ？これってヤバイような・・・」

セシリア「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと
『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲で！」

そう言った瞬間にその場を動くとその場所をレーザーが通り過ぎて
行った。

一夏「アブねっ!?!」

セシリア「上手く避けましたわね、ならこれはどうかしら!?!」

その言葉が終わると同時に『ブルー・ティアーズ』から四つの小さな
機械が飛び出した。

一夏「（あれが風の言ってたビットってやつか？それよりも・・・）
武器は・・・げっ、近接ブレード一本かよ・・・まあ炎との特訓の
時も刀一本だったけどな」

俺がブレードを展開するとすぐに、
セシリア「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうな
んで・・・笑止ですわ!」

・・・そうかよ、

一夏「それはよかったな!」

この勝負、絶対に勝つ!!

一夏 side out

風「やっぱり近接武器だけみたいだね」

炎「そうだね」

千冬「・・・まさかお前達、それを予想していたのか?」

風「はい〜一夏の性格上千冬せんせ〜が用意する機体は近接オンリーかな〜って」

千冬「・・・そうだったのか」

篤「一夏・・・」

時間が経ち一夏はセシリアのビットを壊し若干調子に乗っていて、セシリアの腰に着いていた後二つのビットにミサイルを放たれ周りに黒煙が立ち、落ちたように見えたが・・・

千冬「機体に救われたな馬鹿者め」

風「そうみたいですな〜」

黒煙が消えると、その中からさつきまで戦っていた『白式』とは違う、純白の機体が現れた。

風「フォーマットとフィッティングが済んだみたいですな〜」

炎「そうみたいだね」

風「（ここからどうなるのかな〜？）」

再び一夏side

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

一夏「これを押せばいいのか？」

俺は確認ボタンを押した。その直後、膨大なデータが整理された。それが感覚的にわかる。そして、変化は劇的に訪れた。

キイイイイン……。

高周波な金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。

刹那、俺の全身を包んでいる いや、今や我が身そのもののISが

光の粒子に弾けて消え、そしてまた姿を成す。

一夏「これは……！」

新しく形成されたIS装甲はまだうすぼんやりと光を放ち。そしてより洗練された形へと変化する。

セシリア「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体であそこまで戦ってたっていつの！？」

一夏「どうやらそうらしいな……」

まあ、とにかく……

一夏「この機体はやっと俺専用になった！」

機体を見ると、どこか中世を思わせる鎧に変わっている。そして変わったのは姿だけじゃなかった。

接近特化ブレード・『雪片式型』

一夏「これは……千冬姉が使ってた武器だよ……ふっ」
まったく。つくづく思い知らされる。

一夏「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人は何時でも俺の姉だ。

でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。
これからは……

一夏「俺も、俺の家族を、そして最高の仲間を守る」

セシリア「……は？あなた、何を言って」

一夏「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

セシリア「いったいさっきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

再装填したビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直線機動だ。だが、

一夏「見える．．．．．！」

右手を握りしめ。答えるように、低い機械音を鳴らす『雪片』。使
い方ならわかつている。

千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像。そこでどう使っていたかを
覚えている。

ギンツ！

横一闪。両断されたビットは俺の真横を通り過ぎて、そして爆ぜた。
俺は振り向くことなく再度セシリアへと突撃する。

一夏「おおおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪
片の刀身が光を浴び、
より強い力の存在を俺に伝えてきた。

一夏「俺は．．．勝つ！」

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放
った。

セシリアに斬撃が当たりセシリアのISのシールドエネルギーを切
り裂いた。

そして、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了、勝者 織斑一夏』

この試合結果に第三アリーナに詰めかけたギャラリーが、一瞬沈黙
した後、アリーナを轟かす、大きな賛唱が響いたのだった．．．．．

.

第一章 『戦いの後に』

炎「お疲れ一夏」

第「凄かったぞ一夏！」

一夏「ありがとな、二人とも．．．（きよろきよろ）あれ、風は？」
炎「ああ、対戦相手のセシリア．．．だっけ？が『落ち込んでると思うから』とか言っただけであっちのピットに行っただぞ」

一夏「そうか．．．にしても一次移行する前は『白式』の動きが『紫電』より鈍かったんだけど一次移行した後は凄く良くなったんだけど．．．なんでだ？」

炎「あのな、『紫電』は俺と風の姉の専用機だったんだけど．．．壊れたんだ、だから今は直している最中、一夏の特訓はどれ位直ったかの確認だったんだ。」

それになぎ姉は二次移行もほとんどしてるから初期設定の『白式』よりは性能は凄くよ。」

ああ、なぎ姉って言うのは渚姉の略だから」

一夏「そうだったのか．．．って、姉居たのかっ！？」
そこらはスルースキルを発動した炎だった。

セシリア side

一夏との試合が終わり、セシリアは更衣室で着替えをしながら、今回の試合の事を考えていた。

セシリア「．．．．．」

負けた、その事だけがセシリアの心の中にあっただ。

一夏はISにはほとんど乗った事のない初心者中の初心者、ただ男でISに乗れるだけの存在．．．悪い風に言っくと慢心していたが、それでも負けないとは思っていた。

だが結果としてはその慢心や油断により負けてしまった。

両親が死んでしまい両親が残した遺産に目がくらんだ亡者達から遺産を守る為に色々な事を勉強し、そしてIS適性検査を受けるとA+と言う高ランクの適正を出して、さらにはイギリスの代表候補生にまで上り詰めたが、この一週間で男のIS操縦者と二度戦い、二度とも負けてしまった。

セシリア「ううっ……………」

そう考えているうちに知らない間に涙が流れていた。

コンッコンッ

そんな時に更衣室の扉を叩く音が聞こえた。

セシリア「どうぞ、開けても大丈夫ですよ」

セシリアはすぐに涙を拭い、入ってくる事に大丈夫だと答えた。

誰が来たのかと考えていると、そこに現れたのは、

龍矢「すまない、龍矢だ」

この前の勝負でセシリアに完封した龍矢だった。

セシリア「何の用でしょうか龍矢さん」

この前の戦いの後、ちゃんと謝って少し話をして、名前で呼び合うようにはなっては居たがセシリアに取っては予想外の相手だった。

龍矢「いや、そのだな……………」

セシリア「……………もしも侮蔑等なら聞きたくありませんわよ」

龍矢「いや、もし落ち込んでいたのなら慰めようとな」

セシリア「……………たかだか男のIS乗りだと言いきれに負けたりたわたくしをですか？」

セシリアはどうせ侮蔑や嘲笑をされるのだろうと思っていたが、龍

矢から返って来た言葉は全く違うものだった。

龍矢「ふっ、そんな事を考えていようと考えてしまいと一度は戦った戦友ともにそんな言葉をかける必要がどこにある．．．、たとえ慢心をしていようがしてしまいが最後は全力だったのでは無いか？」

セシリア「．．．そうですわ」

龍矢「ならば、全力で戦い、だが負けてしまった、と言う者に侮蔑や嘲笑の言葉をかけるのは俺の流儀に．．．いや、人間として駄目だろう。」

それにお前は何かを守る為に力を着けていた、俺はそう感じたが？」

セシリア「ええ、両親が死んでしまい両親が残した遺産を．．．そしてオルコット家の名誉を守る為ですわ」

龍矢はその言葉を聞くと同時にセシリアをその両腕で抱き寄せていた。

セシリアはいきなりの事に頭が混乱していたが、龍矢の言葉によってその混乱はなくなった。

龍矢「一人で寂しかっただろう、周りに頼れる人も居なくて辛かっただろう、だが此所では俺たちが『仲間達』居る、寂しかったら人に頼り、甘えたければ甘えれば良いんだ．．．」

その言葉によりセシリアは目に涙を溜めていたが次の言葉によって、龍矢「だから今は俺の胸を貸してやる、だから思う存分、俺に．．．『仲間達』に甘えておけ．．．」

セシリアの心のダムは崩壊したのだった。

セシリア side out

風「ふふっ、僕が来なくても龍矢がちゃんと慰めてくれたんだ．．．

僕もお姉ちゃんに抱きつきたいな、まあ一夏達の所に戻るっかな
）
—
その一部始終・・・まあ全てを見ていたがその事に触れずに風は一
夏達の元に戻って行ったのだった。

そして次の日には一夏がクラス代表となり一夏の特訓には篤と炎、
そして龍矢とセシリアの四人が参加している風景を見るのだった。
・

第一章 『災難』

クラス代表を決める戦いが終わった次の日のHRでこんな事があった。

真耶「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一撃がりでいい感じですね！」

一夏「え、えっ？」

その言葉に一夏は『いったい何の事を言ってるんだ？』と言いたそうな顔をしていた。

風「ねえ〜いつち〜」

一夏「風、そのいつち〜って言うのは俺の事か？」

風「うん〜そうだよ〜。で、本命なんだけど、この事すっかり忘れてたんでしょ？」

一夏「ソ、ソナナコトナイゾー」

炎「片言で言っても説得力無いよ、と言うか風兄、その耳と尻尾と・・・胸は何なの？」

炎の言葉の通りに風の頭とお尻と胸の位置に普通は着いていない物が着いていた。

風「ん〜？ネコ耳にネコ尻尾に胸パットだけ〜？」

龍矢「風、『何言ってるの』と言う目で見るな、おかしいのはお前だぞ」

風「ん〜？・・・そ〜なのか〜」

龍矢「・・・むしろ当たり前だと思っただが」

一夏「（ブツブツ）風は男だ・・・風は男だ・・・」

真耶「風君を持ち帰ったら駄目ですか？織斑先生！？」
千冬「駄目に決まっているだろう・・・」

その事によりこの日のHRの時間に保健室に行った一年一組の人数は半数を超えたとか超えないとか・・・

時間は飛び、一年一組は、アリーナに整列していた。前に立ちジャージ姿の千冬が全員に聞こえるように言う。

千冬「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、それに黒焰兄弟、前に来てISを展開しろ」

その言葉が終わって少しすると五人が前に出て来てISを展開したが一夏は上手く展開できずにいたが、少しして展開する事ができた。するとそこには『白』、『黒』、『紅』、『青』、『紫』と言う五色の色をした相反している様で調和の採れたISが並んでいた。だが一夏は、

千冬「何をしている織斑一秒以内にはISを纏えるようにしろ」

一夏「解ったよ千冬n・・・(パシーン!!!)」

千冬「織斑先生だ・・・よし五人ともそのまま飛べ」

風「りよゝかゝい」

炎「解りました」

龍矢「心得た」

その言葉と同時に三人は一瞬にして飛び上がり、一夏とセシリアは一瞬で飛んだ三人に啞然としていたら、

千冬「そこの二人はそんなに飛ぶのが嫌なのだな、ならばこのアリーナをISを解除して十週走ってこい」

その言葉を聞き『そんな事してたまるか(嫌ですわ)』と思い飛び上がったが一夏は上手く飛べずにいて、

千冬「何をやっている、スペック上の出力では『白式』は『ブルー・ティアーズ』よりも上なのだぞ」

一夏「解ってるんだけどな・・・やっぱ上手く行かないな」

風「いつちこの前教えたのじゃ駄目だった？」

一夏「いや、大丈夫なんだが結構頭に思い描くのが大変なんだよ、あれ・・・」

龍矢「まあ、一夏は実戦になれば何も考えずに出来るタイプの様だからな」

一夏「・・・否定が出来ない」

そんな会話をしていると、

千冬「織斑、オルコット、黒焰兄弟、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

風「じゃ〜先に行くね〜」

炎「その次に行くな」

龍矢「次は貰おう」

セシリア「その次はわたくしが」

一夏「・・・俺が最後かよ」

最初の四人は何も問題なく停止出来たが、一夏は・・・

一夏「うわあ！！セシリア！退いてくれっ！！」

セシリア「は？つきゃあ！？」

なんとコントロールに失敗しセシリアの方に向かって行ったが、

龍矢「はあっ！」

龍矢が回し蹴りで炎に飛ばし、

炎「そいやっ！」

それを裏拳で風の方へ飛ばし、

風「そいや〜」

何とも締まらない声を出しながらジャーマン・スープレックスで地に沈めたのだった。

一夏「ふ、不幸だ・・・ガクッ」

箒「一夏っ!？」

それを見ていた者は口を揃えて『これなんてイジメ!？』と叫んだ
そうだ。

そんなこんなでこの日の授業は終了したのであった。

第一章 『災難』（後書き）

多分次回は、オリキャラとそのISの設定紹介になると思います。

第二章 『パーティー』

一夏にとあるコンボが決まった日の放課後に二つの出来事があった。

??? side

? 「ふうん、ここがそうなんだ．．．」

夜、IS学園の正面ゲート前に、小柄な少女が立っていた。

? 「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

少女はポケットからくしゃくしゃになった一枚の紙を取り出す。

? 「本校舎一階総合事務受付．．．．．って、だからそれどこにあんのよ」

一人、文句を言いながら紙をまたポケットにしまう。

? 「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも少女は学園内に入っていく。

side out

一夏 side

風「というわけでー！ いったークラス代表決定おめでとー！」

女子達 『おめでとー！ー！』

一斉に鳴るクラッカー。

クラスの女子達と風はとても盛り上がっていて、わいわいはしゃいでいる。

そこに見覚えのない女子がいることから考えて、おそらく他のクラス的女子も混ざっているんだろう．．．．．うん。

一夏「……なんだこれ？」

俺だけおいてけぼり状態だ。

確かこれは『織斑一夏クラス代表就任パーティー』とかいうタイトルだったはず。

俺が主役だ……はあ。

大袈裟に溜め息を吐くくらいは許してもらいたい。

女子1「暗いぞ織斑くん！もっと、テンション上げて上げて！」

女子2「主役なんだから暗い顔はしちゃ駄目だって！」

一夏「んなこと言われてもな……」

炎「まあ……テンションが上がらないのは解るけど」

龍矢「ここではお前が主役だ、少しだけでも楽しんでおけ……楽しんでる内にな」

一夏「……そうだな」

そう言っただけ俺は皆の元に行こうとすると……

風「いつち〜！」

『ゴスツ！』と言う音と共に、いきなり風に抱きつかれた。

一夏「ぐはっ!?!」

今のはもろに入った……

風「ごめんね〜、だいじょ〜ぶ〜？（汗）」

一夏「あ、ああ……大丈夫だ……」

焦ってるしわざとでは無かったみたいだ。

一夏「で、どうしたんだよ風？」

風「ん〜、いつち〜これ食べて〜」

一夏「シュークリームか、美味そうだな有難く貰うよ」

そう言っただ俺は一つ食べると思わずこっ叫んでいた。

一夏「う、うまあああああい!!」

side out

風「美味しかったみたいだね〜良かったよ〜」

一夏「えっ?もしかしてこれ風が作ったのか?」

風「そのと〜り〜」

一夏「なあ、もう無いのか?」

風「それなら〜」

龍矢「まだあつちのテーブルにあるぞ、一夏」

炎「いつたいどれだけ作ったのさ〜」

龍矢が指を指したテーブルを見るとクラス全員で食べても食べきれない量のケーキやシュークリーム等が置いてあった。

一夏「．．．あれって、もし残ったらどうするつもりだ?」

風「食堂にきている人たちに配ろっかな?」

一夏「やっぱり考えてなかったのか．．．」

龍矢「．．．一夏、こいつの行動はあまり深く考えるな、それが一番の解決策だ」

炎「これって本当だから笑えないんだよな．．．」

一夏「．．．俺も今度からそうさせてもらっよ」

龍矢「ああ、そうしておけ．．．」

三人は食堂にきている人たちにデザートを配りに行っている風を見てそんなことを話していた。

と、そんな時、

薫子「はいはい、新聞部です。」

話題の新生、織斑一夏君と一週間前に転校して来た男の子に特別

インタビューをしに来ました〜！

あ、私は二年の黛薫子、よろしくね。

新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

と、一夏と龍矢と炎の三人は名刺を渡された。

薫子「あれ？確か転校生は三人の男の子って聞いたんだけど・・・」

一夏「ああ、もう一人なら・・・風こっちに来てくれ！！」

風「何〜いつち〜？」

薫子「・・・えっ！？この娘があと一人の男の子！？」

風「??？」

龍矢「まあ、こんな姿をしているからな・・・」

炎「先輩、風兄の事は気にしたら負けです」

薫子「そ、そうなの・・・コホン、では気を取り直して・・・まずは織斑君ずばり、クラス代表になった感想をどうぞ！」

薫子は一夏にずっとボイスレコーダを向ける、その瞳は子供のように無邪気に輝かせていた。

一夏「えーと・・・まあ、なんとというか、頑張ります」

薫子「えー、もつといいコメントちょうだいよ〜。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

一夏のコメントに不満そうな薫子、どうやら新聞部はインパクトのあるコメントを求めているようだ。

一夏「自分、不器用ですから」

薫子「うわ、前時代的！じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして、次は・・・炎君何か一言どうぞ！」

炎「それなら・・・『目の前に立ち塞がる敵は叩き潰す迄だ！』で、どうですか？」

龍矢「なら俺は・・・『受けてみよ・・・我が剣帝の一撃を』、これで構わないか？」

薫子「（か、カツコイイ）ぜ、全然大丈夫です、はい！！」
この二人の周りに居た女子達は大半の人たちが鼻を押さえたり、
「キヤアアアアア！！！」と叫んでいた。

薫子「じゃ、じゃあ最後の一人、ふ、風君どうぞ！」

風「ん〜そうだね〜・・・『ふふつ、死にたいのなら何時でもかか
つて来なさい？』、なんてど〜ですか〜？
つて皆どうしたの〜？」

周りを見るとさっきと違って変わって顔を青くした女子達＋一夏の
姿があった。

理由は・・・まあ言わずとも解ると思うが、さっきの風の口調がい
つもと違い本気で言っている様にしか聞こえなかったからである。

炎「うわぁ・・・」

龍矢「風、半分位本気で言っただろう、今の台詞」

風「ん〜ん、七割が本気〜」

その言葉を聞いてさらに顔を青くしたのは仕方の無い事だろう。

その後に薫子先輩が顔を青くしながらも専用機持ちの写真を撮りた
いと言っていて撮った時にクラス全員が入ってくると言うハプニン
グ？的なものも発生したのだった。

・・・ちなみに次の日のHRで「体重が・・・」と落ち込む
女子達が多数いたらしかかったが、『気にしたら負けだ』と思った龍
矢と一夏が居たらしい。

第二章 『パーティー』（後書き）

風が若干黒い事になりました

これを素にするか、今迄通りにするか、どっちにしようかなと迷っております切裂でした

・・個人的にはどっちでもいいんだよね（笑）

第二章 『転入』

パーティーがあり、色々な事があつた日の翌日、
風「うにゅ〜」

龍矢「39度5分、完璧に風邪の様だな」

風は風邪を引いてダウンしていた。

炎「さすがに今日は寝てなよ風兄」

風「でも〜（泣）」

龍矢「解っている、放課後に連れてくるから今日は部屋に居ろ（むしろ、お前が風邪だと聞いて部屋も聞かずに飛び出すだろうがな．．．）」

炎「はい薬、飲んでおとなしく寝てないと治らないよ？」

風「うう〜苦いの嫌〜」

この時二人は『やっぱり（こいつノ風兄）はまだ子供だ』と思つたのだった。

そして登校し、一夏に会つて一夏と龍矢達が席に着くと近くの席の女子が、

女子「織斑君に龍矢君、炎君おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？

そして風きゅ．．．風君は？」

と話しかけてきた。

一夏「転校生？今の時期に？」

龍矢「転校生か．．．ちなみに風は風邪で休みだ」

女子「そうなんだ．．．お大事にって言っておいて」

龍矢「了解した」

その話の中で一夏は転入生することに疑問を持ったのだが、龍矢と炎

は全く疑問に持たず、『やっと来た（のか／んだ）』と思っていた。

女子「しかもね、まさかの二人も転校して来るんだって」

炎「二人？」

炎は一人の予想は付いていた為、何も思わなかったが二人と言う事に疑問を持っていた。

女子「なんでも中国の代表候補生と日本の代表候補生なんだってさ」

一夏「ふーん」

セシリア「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

こちらの会話を聞いていたのかセシリアが腰に手を当てたポーズを決めながら話しに入ってきた。

龍矢「ちなみに何組に転校する予定なんだ？」

篝「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

女子「それがね、中国の子が二組で、日本の子が一組なんだって！」

一夏「どんなやつなんだろっとな」

炎「気になってるの？」

一夏「ん？ああ、少しは」

篝「ふん．．．．．今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

セシリア「そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。

ああ、相手ならこのわたくしと龍矢さんが務めさせていただきますわ」

一夏「ああ、ありがとな。まあ、やれるだけやってみるか」

龍矢「やれるだけでは無く、せめて善戦が出来る位には鍛えるつもりだ」

第「そうだぞ、男たるものそのような弱気でどうする」

女子1「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

女子2「織斑君、がんばってねー」

女子3「フリーパスのためにねー!」

女子4「目指せ、優勝!」

一夏の発言1に対して約6の返しが来るのだった。

．．．ちなみにこのクラス対抗戦で一位のクラスには優勝商品に学食デザートが半年間無料になるフリーパスが配られるようになってくる。

「今のところ専用機を持っているクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

一夏は周りの空気を読んで「おう」と返事をする。するとー

?「ーその情報、古いよ」

教室の入り口から声がした。

?「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている少女がいた。

一夏「鈴．．．．?お前、鈴か?」

鈴「そうよ、中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす鈴音、つられてトレードマークのツインテールが軽く揺れる。

一夏「何格好付けてるんだ?すげえ似合わないぞ」

「んなつ．．．．!?!?なんてこと言うのよ、アンタは!」

格好良く決めようとした鈴音だったのだが、一夏の一言ですぐに元の調子に戻されてしまった。

千冬「おい」

鈴「なによ!？」

鈴は声をかけられて後ろへ振り向く、するとバシッ!と鈴音の頭に強烈な一撃が加えられた。

そこには、一組の担任、鬼教官千冬が立っていた。

千冬「もうSHRの時間だ、教室に戻れ」

鈴「ち、千冬さん……」

千冬「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな、邪魔だ」

鈴「す、すみません……」

鈴音は千冬に怯えながらドアからどく。

鈴「またあとで来るからね!逃げないでよ、一夏!」

千冬「さつさと戻れ」

鈴「は、はいっ!」

千冬の睨まれて鈴音は走って二組の教室に戻っていった。

一夏「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

一夏がそう呟いたらクラスメイト達が一夏の席に集まった。

第「……一夏、今のは誰だ?知り合いか?えらく親しそうだったな?」

一夏はクラスメイト達の質問攻めに合いそうになるが、彼女達はこの教室に鬼教官がいるのを失念していた。

ゆえに、『バシッバシッバシッバシッ!』立っていた女子達は全員、千冬の出席簿で叩かれた。

千冬「席に着け、馬鹿ども」

女子達『は、はいっ!』

千冬「全員着いたな……よし、では知っている者も居る様だが転

校生の紹介をする、入って来い」

そう言われると『はい』と間延びした声が聞こえて来て紫色の髪をした女子が入って来た。

千冬「では自己紹介をしろ」

？「私は黒焔 渚と言います。好きな物はふう君で、ふう君とは双子の姉になります。これから一年よろしくお願いします」
そう言うのと教室をキョロキョロ見始めて、

渚「あれ？りゅー君、ふう君は？」

龍矢「風邪で寝込んでいる」

そう龍矢が言うのと目を大きく見開き真面目な顔で、

渚「先生」

千冬「何だ？」

渚「ふう君のお見舞いに行つてk・・・」

『パシーンツ！！』

渚「きゃうっ！？」

千冬「良い訳が無かるう」

渚「でも」

千冬「でもかも無い、昼休みにでもその二人にでも部屋を聞いて行け。」

とにかく授業を始める、早く席に着け」

渚「・・・解りました（泣）」

そんなこんなで新しいルームメイトが増えたのであった。

第二章 『転入』（後書き）

何となくとじょを鈴ちゃんと一緒にタイピングにしてみました

誤字脱字やかんそ、批判等も受け付けております

第二章 『お見舞いへ行こう』

前回のあらすじ（的なもの）

渚が転校して来てブラコンを披露して千冬さんの出席簿アタックを
転校初日で喰らっていた．．．様な気がする（オイッ！）

そんなこんなで昼休み、

渚「りゅ〜君、えん君」

龍矢「何だ？．．．と言いたいが」

炎「予想が出来るよ．．．」

渚「ふう君のお見舞い行くよっ！！」

龍矢・炎『やつぱり（な／ね）．．．』

心の中で予想．．．まあ、言葉にも出していた為ため息を吐く事し
か出来ない二人であった。

龍矢「ところで渚」

渚「何〜りゅ〜君？」

龍矢「今の時点で見舞いに行つて何をするんだ？」

渚「ん〜とね、ギョツとしてあげる〜」

炎「なぎ姉、逆に風兄の熱が上がるような気がするよ？」

渚「なんで〜？」

実の所、風は渚に久しぶりに遭えると言う事で楽しみにしすぎて．．
．．と言うより緊張？的な事をして熱を出したのを炎は知っているか
らだった。

炎「まあ、風兄にも色々あるんだよ．．．」

渚「????？」

龍矢「俺にはよく解らないが、気にしなくても良いのだろう、炎」
炎「まあね（何で気づかないんだろう）」

渚「むう、じゃあどうしたら良いの〜！」

炎「龍兄が『放課後には連れて行く』って言ってたから放課後に行けば良いよ」

渚「．．．解った〜放課後にします〜」

龍矢「ならば放課後になったらすぐに向かうぞ」

炎・渚『解ったノリよ〜かい〜』

そして時は立ち放課後になった。

龍矢「では、向かうとしようか」

渚「お〜〜!!」

炎「引きずるのは止めてくれるかな、なぎ姉．．．」

渚「じゃあ行くよ〜！」

炎「はあ．．．（ズルズル）」

渚は聞く耳を持たず、龍矢はあえて無視して風の部屋に向かったのだった。

そして部屋の前にて、

渚「りゅ〜君、えん君、服装も髪の毛もおかしく無いよね!?!」

炎「大丈夫だよ、なぎ姉」

龍矢「渚、風が気にすると思うか？」

渚「そ、そ〜だねふう君は気にしないよね」

龍矢「と、言う訳で開けるぞ?」

渚「う、うん」

龍矢「風、入るぞ」

そう言っただアを開けると『キィ』とドアの開く音がして三人は中へ入ると、

風「すうすう」

風はぐっすりと寝ていた。

渚「．．．ふう君寝てるね」

龍矢「そうだな」

炎「隣の部屋だけど、帰って良いかな？」

龍矢「俺は構わんぞ」

渚「久しぶりに皆で居たいんだけど．．．駄目？（ウルウル）」

炎「なんかすみませんでしたorz」

龍矢「さて、そろそろ起こすか。風、起きろ（ゆさゆさ）」

風「にやう．．．何〜りゆ〜や〜（じじじ）」

そして風の意識が少し覚醒すると、

風「（ぱちぱち）．．．おね〜ちゃん？」

渚「ふう君、久しぶり」

風は遭いたいと思っていた姉がいきなり目の前に現れて少し戸惑ったが、その後に取りった行動は．．．

風「．．．．．（ボンツ）ふにゆ〜（バタン）」

気絶だった。

渚「ふう君!？（アセアセ）え〜と、きゅ、救急車呼ばないと〜!？」

炎「はあ．．．だから言ったのに．．．」

龍矢「渚、落ち着け。風は気絶をしたただけだ」

渚「何で〜!？どうして気絶しちゃったの〜!？」

炎「久しぶりになぎ姉の顔を見て、しかも心の準備が出来てなかったから．．．かな」

渚「私のせいなの！？」

龍矢「今のはそうとしか言いようが無いな」

渚「ふえええ〜〜！？」

そんなこんなで久しぶりの兄妹の顔合わせの時間は過ぎて行ったのであった。

第二章 『お見舞いへ行こう part2』

前回のあらすじ(的な物)

風が気絶をしました。(主に・・・というか完璧に渚のせい)

風が三十分くらいして、目を覚ますと・・・

風「龍矢、何で？何でお姉ちゃんが居るの？」

龍矢「落ち着け、今日来るのは知っていたはずだろう？」

風「まだ授業中じゃ・・・」

炎「もう放課後だよ風兄」

風「あれ、炎居たの？」

炎「最初から居たよ！！」

風「知らなかったよ」

炎「何このイジメ」

渚「それはそれで置いて置いて」

炎「置かれたっ！？」

・・・炎が完璧に弄られキャラの気がしなくも無いけど置いて置いて。

炎「地の文にも置いて置かれたっ！？」

龍矢「何を言っているんだ、炎？」

炎「何か言わないといけない気がして・・・」

渚「ふう君、本当に大丈夫？」

風「だいじょぶだよ、おねちゃんがギョツてしてくれてたら」

渚「ん(ギョツ)」

風「おねえ、ちゃん？」

渚「なに？ふう君？」

龍矢「・・・炎、帰るぞ」

炎「・・・了解、さすがにこの空気はいつも思っけど無理だわ」
「・・・この空気に耐えられなくなった二人はさっさと部屋に帰ろうとすると、」

『コンコン』

と、部屋のドアを叩く音が聞こえて来た。

龍矢「はい（ガチャ）」

真耶「うわあ、龍矢君！？すみません、風君の部屋と間違えてしまいました！！」

龍矢「大丈夫です山田先生、部屋なら間違えていません」

真耶「そ、そうですか（ほっ）」

龍矢「風に用事ですか？」

真耶「いえ、渚さんは居ますか？」

炎「おーいなぎ姉、先生が呼んでるよ」

渚「むう・・・ふう君ちよっと待っててね」

風「うん」

そうして渚は出て来たが、

渚「何ですか？（プク）」

風との久しぶりの甘々タイムを邪魔されて、若干拗ねていた。

真耶「はい、お部屋の鍵を持ってきました、お部屋は風君が私にお願いをして来て、それが叶ったのでこのお部屋です」

渚「・・・（ポクポク）！？って事は・・・ふう君と一緒に部屋ですか！？」

その言葉に渚と炎、龍矢は驚いていた。

真耶「あの・・・嫌なら変更しますが・・・」

渚「ありがと〜ございます〜！！」

真耶「へ、ええ!？」

渚はその事をもの凄く、山田先生に抱き着いて喜ぶほど感謝をしていた。

まあ、山田先生はもの凄く混乱していたが・・・
渚が抱き着いてから数分して、

渚「先生すみません／＼／＼（ぺこぺこ）」

真耶「き、気にしていないので、大丈夫ですよ／＼／」

顔を真っ赤にして謝る渚と、顔を真っ赤にして大丈夫と伝える山田先生の図が出来ていた。

真耶「そ、それでは私はこれで!!」

渚「ありがとうございます」

そうして山田先生が帰ってから部屋に戻ると・・・

風「ちよっとって言ったのに・・・」

拗ねている風が居たのだった。

渚はそれを宥めるのに数十分使い、二人は一緒のベッドで寝て、この日は終わりを告げたのだった・・・

第二章 『お見舞いへ行こう part2』 (後書き)

炎「ねえ、今回の俺の扱い、若干酷く無い？」

龍「気にしたら負けだ」

炎「．．．って事は、少しは酷いと思ってくれたんだ」

龍「一割だけな．．．」

炎「俺に味方は居なかった!？」

第二章 『鈴との遭遇』

渚が転入して来てから二日目の朝、

風「ふっかっつー!」

渚「ふう君、どしたの〜?」

風「ん〜、昨日熱があったのにきよ〜は治ったから〜」

渚「・・・あ〜、そう言えばそうだったような〜・・・」

風「忘れてたの?」

渚「・・・ごめんね〜」

風「う、うわ〜ん! (ボタン!! タッタッタッタ)」

今日の朝一番の風の行動、拗ねて逃げる。

食堂にて、

渚「ふう君機嫌直してよ〜」

風「・・・(プク〜)」

龍矢「渚、何をしたんだ? (もぐもぐ)」

炎「何したんだらうね (もぐもぐ)」

渚説明中・・・

龍矢「・・・渚が悪いな」

炎「なぎ姉が悪いね (もぐもぐ)」

風「・・・(ぱくぱく)」

渚「ふう君、許してよ〜・・・(ボソツ) 今日お風呂一緒に入るか
ら〜」

龍矢「そんな物で釣れるわけがな・・・」

風「おね〜ちゃん拗ねてごめんね〜」

龍矢「釣れるのか・・・」

風の将来がとても不安になった龍矢だった・・・

そんな時、

? 「ねえ、ここの席使っても大丈夫?」

龍矢「ああ、構わないぞ」

? 「ありがとう」

渚「あれ、あなたは昨日の・・・」

? 「ああ、あんた私と一緒に居た転入生よね?」

渚「はい、私は黒焔 渚って言います、渚って呼んでね、そして実は日本の代表候補生なのだ」

? 「私の名前は鳳 鈴音よ鈴って呼んで、私は中国の代表候補生よ」

龍矢「渚の事は知っていたが、鳳も昨日来た転入生だったのか・・・」

鈴「ええそうよ、あんた達は・・・」

龍矢「黒焔 龍矢、一応男子のIS操縦者だ、一応18だが呼び捨てで構わない」

炎「俺は黒焔 炎、この兄妹の一番下だよ、炎で良いから」

風「(もきゅもきゅ・・・ゴクン)僕は黒焔 風だよ、一応性別は男だよ、風って呼んでね、鈴ちゃん」

鈴「ええっ!? あんた男だったの!?!」

風「男の娘と言う事で」

鈴「なんであなたは女物の服を着てるのよ!?!」
鳳さんの言葉はごもつともです。

風「ん?・・・おねちゃん你真似」

渚「そうだったんだ」

鈴「つて、渚も知らなかったんかい!?!」

龍矢「ちなみに俺も初耳だ」

炎「俺もだね」

鈴「何でよっ!?!」

鈴は混乱している、「コマンドは？」

宥める

ほっておく

さらに煽る

風は宥める事にした。

風「鈴ちゃん、落ち着いて〜（ぎゅっ）」

鈴「ああもう！（なでなで）こいつ可愛いなあ、こんちくしょう！
！」

風「ふにゃ〜？」

渚「（プク〜）ふう君のばか・・・」

龍矢「風、その辺にしないと渚が拗ねるぞ」

風「おね〜ちゃんもしかして・・・ヤキモチ？」

渚「当たり前だよ〜！」

鈴「うわぁ・・・認めるんだ・・・」

炎「いつもの事だよ」

鈴「アンタには同情するわ・・・」

そんな事していると、

千冬「もうすぐHRが始まるぞ！遅れた者はグラウンドを十周だ！！」

鈴「うわっ、千冬さん！早く食べなきゃ！！」

龍矢「三人とも、先に行つててくれ」

炎「何か用事、龍兄？」

龍矢「ああ、少しな」

炎「じゃあ先に行くな、行くよなぎ姉、風兄」

そして三人は去つて行った。

その会話から数分後、

龍矢「食べ終わったのか？」

鈴「食べ終わったけど．．．何でアンタは残ってるのよ？」

龍矢「HR開始まで後二分か．．．」

鈴「はあ．．．遅刻確定ね．．．」

龍矢「大丈夫だ（ガシッ）」

鈴「へっ？」

龍矢「少し走るが我慢してくれ（ダッ！）」

鈴「にやあああああ！？」

『タツタツタ』

龍矢「HR開始十秒前．．．間に合っただろう鳳？」

鈴「はあ．．．はあ．．．アンタね．．．少しは速度をかんぐ『キーンコーンカーンコーン』」

龍矢「すまん、昼休みにでも話は聞く」

鈴「ちよっ！？待ちなさいよっ！．．．．．昼休み覚えときなさいよっ！！」

こんな感じで中国娘との朝の出会いが終わったのだった。

第二章 『模擬戦 炎VS龍矢』

鈴と知り合った日の昼休み、

龍矢「鳳、朝の件に関してだが．．．済まなかったな、あれ以外にお前が遅刻しない方法が見つからなくてな」

鈴「ああ、あれそれで良かったんだ．．．（ボソツ）ありがと．．．」

龍矢「礼は受け取るが、あれは本当に済まなかったな」

鈴「いいわよ、ちゃんと謝ってくれたし」

龍矢「そうか．．．なら詫びに俺と炎が模擬戦をするんだが、見学しないか？昨日の様子を見ると一夏とは顔を遭わせずらいだろうしな」

龍矢と炎は風の部屋から帰る時に一夏の部屋から泣きながら走って出て行った鈴を見ていたのだった。（この時は互いに名前を知らなかった）

鈴「あゝ．．．それもそうね．．．だったら私とも戦ってくれないかしら？」

龍矢「風に頼めば戦ってくれると思うからな．．．平気だとは思っぞ？」

鈴「OK、ならどのアリーナに行ったらいいの？」

龍矢「今日は第二アリーナだ」

鈴「了解、放課後に第二アリーナね。じゃあまた放課後に」

龍矢「ああ、また後でな」

そんなこんなで放課後、

鈴「と言う訳でお邪魔してるわよ」

風「んゝ、りよゝかいしましたゝ」

渚「ふう君、龍君も炎君も準備出来たよ」
二人はISを展開していて、龍矢は「ブラック・ナイト黒騎士」、炎は「烈火」の状
態だった。

風「じゃあ勝負開始〜!!」

その言葉と同時に二人は・・・『ガキイイン!!』と言う音と共に切り掛かった。

o t h e r s i d e

炎と龍矢は空中で、炎は重剣、龍矢は西洋剣で何度も切り掛かって
いた。

龍矢「ハッ!!」『ギイイン!!』

炎「セイヤツ!!」『ガアアン!!』

二人とも一進一退の様に見えるが、龍矢のISの方がスピードが高く、その動きで炎のISを翻弄していた。

炎「くっ!!」

龍矢「受けてみよ・・・剣帝の一撃を・・・『鬼炎斬』!!」

その言葉が刻まれると同時に龍矢は回転し、炎を纏ったかのような
斬撃を繰り出した。

炎「『烈火』、単一仕様能力起動『紅蓮』!!」

その言葉がキーとなり炎のISは炎を纏い、そのまま剣に炎を纏わ
せ龍矢の技と相殺にした。

龍矢「チッ!流石に後手に廻すとそっちの方が上か・・・」

炎「そろそろ機体を変えようか?」

龍矢「そのつもりだ!!」

炎「『フェアリオン』をスロット!!」

龍矢「『アルトアイゼン・リーゼ』をスロット!!」

その言葉により、炎は腰に何本もの剣を携えたISの装甲が薄い赤い機体に、龍矢は杭打ち機バンカーを右手に携え肩にミサイルポットの様な物を着けた炎とは逆にIS装甲の厚い赤い機体になった。

その頃地上では、

鈴「えっ!? 何でISの見た目や装甲が変わってんのよ!？」

風「後で説明してあげるから〜待ってね〜鈴ちゃん〜」

下では鈴が混乱していた。

炎「うわあ〜、それって...」

龍矢「お前の思っているもので合っていると思うぞ」

炎「って事は...最悪だ...」

龍矢「ばやく暇があるなら避けるよ?」

そう言くと龍矢は瞬時加速で近づくと...

龍矢「喰らえっ『リボルビング・ステーキ』!!」

右手に携えた杭打ち機で炎の『フェアリオン』を撃ち貫こうとしたが、

炎「くっ!」

炎は三次元躍動旋回によって回避を試みたが避けきれずに左手の装甲を貫かれた。

ちなみにこの時点での両者のシールドエネルギーは

龍矢 MAX 700 現在 478

炎 MAX 800 現在 276

で、龍矢の方が有利な状態であった。

炎「くっ！仕方ないか．．．龍兄、今日こそ勝たせてもらおうよ．．．」

龍矢「ふっ．．．どこからでもかかって来い！！」

炎「単一仕様能力起動、『幻影舞闘』ファンタム・ダンス！！」

発動と同時に炎のシールドエネルギーが半分になり、炎の横に『フェアリオン』とは違う白いスカートの様な物を着けた全身装甲の機体が現れた。

炎「行くよっ！『フェイクライド』！！」

龍矢「ならば、俺も本気で行かせてもらおう．．．単一仕様能力起動、『切り札』ジョーカー！！」

龍矢が乗っていた『アルトアイゼン・リーゼ』は単一仕様能力が発動すると同時に、装甲の色が『赤』から『青』へと変化した。

炎「行くよっ！『ロイヤルハート・ブレイカー』！！」

龍矢「どんな装甲だろうと撃ち貫く！『リボルビング・バンカー』！！さらに『アヴァランチ・クレイモア』！！」

互いに全力を持ってそれぞれが持つ最強の技どうしがぶつかり合った．．．

その結果は、

龍矢のシールドエネルギー 126

炎のシールドエネルギー 0

と、龍矢の勝利と言う結果に終わったのだ．．．

o t h e r s i d e o u t

勝負の後、

炎「やっぱり負けたか．．．」

龍矢「言っただろ？」「どんな装甲だろうと撃ち貫くのみ」「と」

鈴「お疲れ．．．と言いたいけど．．．あのIS達は一体なんなのよ!？」

風「あれは、僕が作った。」「相手や戦闘の状況に合わせて、状態を変える事の出来る事を目的にした。」「五世代機」なんだ。」

鈴「五世代機って!?!まだ他の所は第三世代すら試作段階なのよ!?!」

風「作れた物は、仕方が無いよ。(にっこり)」

鈴「ああもう!やっぱりこいつ可愛いなあ!」

と、鈴は頭の中がよく解らない事になっていたが、最終的には風との模擬戦をして、『神風』から『蜃気楼』にスロットした後解放^{パージ}をしてしまったため、勝負が終わった後にまた質問攻めに合うのだった。

第二章 『模擬戦 炎VS龍矢』（後書き）

友達「こんな勝負内容で大丈夫か？」

作者「大丈夫だと良いな〜問題も無ければ〜」

と、言う会話がこの話の原稿（作者は紙に一度書いてそれをパソコンに打ち込んでいたので）

を〜友達に見せた時にありました〜

その時に〜『内容を少し変えようかな〜？』と想いましたが〜あえて変えませんでした〜（笑）

第二章 『クラス対抗戦 part 1 「開幕」』

鈴と仲良くなり、あれから色々話をしている解った事、

- 1 ・一夏の二人目の幼なじみ（一人目は箒）
- 2 ・クラスの子にクラス代表を譲ってもらった（若干脅したらしい）
- 3 ・一夏の事が好き（言っではないが話からそんな感じがした）
- 4 ・一夏と喧嘩中（みたいなきことを言っていた）
- 5 ・これ以降も訓練を一緒にしてほしい（圧倒的な戦い「龍矢vs炎」を見たから）
こんな感じらしい。

そして話は進みクラス対抗戦当日、

とある男子とネコ耳さんとの会話である・・・

龍矢「なあ、風」

風「なに〜？」

龍矢「俺が誘ったから言える事じゃないんだが・・・鳳に俺たちのISを『五世代機』と教えたのはまずく無いか？」

風「・・・そ〜言えばそんな気が〜（汗）」

龍矢「まあ鳳も言い触らしていないみたいだから問題は無いと思うが・・・」

風「いちおう企業秘密だから他言むよ〜って言わないとね〜・・・」

龍矢「済まないな風・・・ちなみに言くと昨日の夜に気がついた」

風「ま〜、り〜ちゃん（風命名）には僕から言うよ〜」

龍矢「頼む・・・」

鈴に『五世代機』と伝えた事がまずいと言う事に一週間してから気づいた人達だった。

試合開始数分前、

炎「龍兄、風兄、席はこつちだよ」

龍矢「ああ、済まないな炎、渚」

渚「何も問題ないのですよ」。

．．．あつ、ふう君の席は私の膝の上だよ」

風「そ〜なのか〜（ぽすつ）」

渚「そ〜なのだ〜（なでなで）」

炎「．．．何このバカップル」

龍矢「気にしたら負けだ．．．始まるぞ」

そう龍矢が言うと、アリーナ上空に鈴と一夏が待機をしていた。

o t h e r s i d e

アナウンス『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、一夏と鈴は空中で向かい合う。

その距離は五メートル程で一夏と鈴は開放回線で言葉を交わしていた。

鈴「一夏、本気で潰すからね」

一夏「上等だ、手加減なんて期待するなよ？」

鈴「一応言つとくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ、シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる、そこらへん分かってんでしょうね？」

それは脅しではなく本当のことである。

IS操縦者に直接ダメージを与える事に特化した．．．いや、ダメージを与える為だけの装備も存在するらしい。

つまり、『殺さない程度にいたぶることは可能』という意味にもなる。

鈴「それとアンタと同じクラスの龍矢達とも、この一週間特訓したんだから」

一夏「マジかつ!?!?」

鈴「マジよ、なんとかこの一週間で攻撃を当てれたけど・・・何なのよあの単一仕様能力は・・・」

一夏「・・・誰のでどん何なんだ?」

一夏は今後の参考の為そう聞いたのだったが・・・

鈴「風で『蜃気楼』の『バフエクト・サンクチュアリ絶対守護領域』ってやつよ・・・」

一夏「何か名前だけでも、防御って感じなんだけど・・・」

鈴「じゃあね一夏・・・自分が閉じ込められてあっちが攻撃した瞬間にその攻撃の当たる位置だけその防御を無くしたら?」

一夏「・・・すまん」

鈴「いいわよ・・・もう・・・」

風「ねえねえ僕って何か酷い事したの?」

炎「自覚が無いって・・・罪だよね・・・」

龍矢「・・・そうだな」

渚「・・・そうだね」

風「???」

鈴「まあ良いわよ、気を取り直して始めるわよ一夏」

一夏「そうだな、始めるとするかつ!!」

その言葉と同時に試合開始のブザーが鳴り、開幕を告げるのであった。

第二章 『クラス対抗戦 part 1 「開幕」』（後書き）

新しく単一仕様能力用の話でも書くか？IS設定の所に追加しようかな？と考えていますがどっちが良いですか？

第二章 『クラス対抗戦 part2 「勝負」』 (前書き)

本日一話目

第二章 『クラス対抗戦 part2 「勝負」』

前回のあらすじ(的なもの)
クラス対抗戦開始)

o t h e r s i d e

鈴はブザーが鳴ると同時に『甲龍』の武装である青龍刀．．．『双天月牙』を構えて振りかぶり、一夏に襲いかかったが．．．『ガキイン!!』と言う音と共に一夏の武器である刀．．．『雪片式型』で初撃を止めたのであった。

鈴「初撃を止めるなんてやるじゃない」

一夏「悪いが俺も龍矢達に鍛えられてな、『初撃は避けるか止めるかにするのだ』って風に言われてるんでな！」

鈴「へえ．．．(龍矢達は一夏も鍛えてたんだ．．．なら本気で行かせてもらおうわ!!)」

一夏「他にも色々あるんだが．．．また今度教えてやるよ!!」

そう言うで一夏は距離を少し離して剣を構えた。

それに大して鈴は．．．

鈴「喰らいなさいっ!!」

そう言うど肩の装甲がスライドし、中央の球体が光った瞬間に一夏は吹き飛ばされていた。

一夏「ぐっ!?!」

鈴「今のはジャブだからね」

そう言うどさつきよりも大きい衝撃を一夏を襲ったのだった。

一夏「何だよ、今のはっ!？」

そう言いながらも回避行動を行っているのは訓練の賜物なのだろう。

渚「ふう君、今のつて？」

風「あれはね、おねちゃん『衝撃砲』って言うりくちゃんの『甲龍』にとくさいされてる中国の第三世代の武器なんだよ」

渚「じゃあ、何で攻撃が見えなかったの？」

龍矢「あれは、空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰によって生じる衝撃を砲弾として打ち出す武器だ」

渚「そくなんだ」

風「そくなのです」

炎「でも、一夏も見えない割にはかなり避け始めたよ」

龍矢「まあ、俺たちの特訓も特訓だったからこれくらい避けてもらわないとな」

炎「...あの特訓か」

鈴「へえ、この『龍砲』の弾は見えないから避けづらいに結構避けるじゃない」

一夏「これ位龍矢達の訓練に比べたら避けれるさ」

鈴「どんな訓練をしたの？」

一夏「...音速を超えた弾って、死ぬほど痛いんだよな...」

鈴「それってどんな訓練なの...」

一夏「まあ、この事は置いて置いて...本気で行くぞ、鈴」

鈴「かかって来なさいよ、一夏」

一夏はそう言うのと鈴の周りをかなりのスピードで飛び回り始めた。

鈴はそうなる中々『龍砲』が当たらない為かがむしゃらに撃ち始め、隙が出来た所に一夏は瞬時加速を使い一瞬で近づき、単一仕様能力である『零落白夜』を発動させ切り掛かるうとした時に...

『ズドオオオオン!!』

と言う音と共にアリーナのシールドを破り二人の近くにビームが降って来た。

アリーナの緊急用のシェルター等が閉じ、砂煙が晴れるとそこには全身装甲のISが一機．．．そしてその上空には同じ様なISが五機、そして外には五機以上の全身装甲のISが浮かんでいた。

第二章 『クラス対抗戦 part3 「襲撃 part風」』

前回のあらすじ(的なもの)
たくさんのISっぽい物が襲撃して来た(笑)

そのISの襲撃に教師陣もかなり慌てている状況だった。

教師「アリーナに全六機、学園の外に全十機を確認しました」

真耶「お、織斑先生！？どうしましょう!？」

千冬「くっ！教師陣は素早く部隊を組み押さえに向かえ！！山田先生はアリーナの二人に避難勧告を！」

真耶「はいっ．．．!?織斑先生、通信が通じません!!」

千冬「何だどっ!!」

その言葉の通り全ての通信やアリーナの制御装置などが機能しない状態になっていたが．．．

真耶「っ先生！今凄い勢いで通信に関してだけです直ってます!!」

千冬「何が起きている!？」

龍矢「織斑教諭、龍矢です」

千冬「龍矢か」

龍矢「今風がこの学園のシステムを全て塗り替えています、俺と風、炎はあのISを押さえに行きます」

真耶「風君がこれをつ!？」

千冬「．．．勝算はあるのか？」

炎「織斑先生、俺たちは何の為に来たか．．．覚えてますよね？」

千冬「．．．そうだったな、頑張ってくれ．．．お前達が頼りだ．．．」

龍矢・炎・風「承知した／了解ノりよ〜かい〜!!」

その言葉を言い終わった直後に『ズドオオオン』と言う音が聞こえて来た。

そして山田先生の口からこう告げられた・・・

真耶「つ織斑先生！・・・織斑君が・・・落とされました・・・」

千冬「つ！？」

龍矢「一刻の猶予もないか・・・炎、風この隔壁を俺が貫く行くぞつ！！！」

その言葉と同時に『ガシャアアアン！！』と言う音が聞こえて来たのだった。

千冬「頼むぞつ・・・・・・・・！！！」

炎「『残月』をスロット！！！」

龍矢「『ヴァイサーガ』をスロット！！！」

風「『蜃気楼』をスロットして単一仕様能力起動、パーフェクト・サンクチュアリ『絶対守護領域』！！・・・行くよ鉄屑達、エネルギーの貯蔵は十分かな？・・・中は僕がするから二人は外のをお願い！！！」

炎・龍矢「了解！！！」

その言葉に反応する様に敵のIS達が動こうとしたが・・・

龍矢「『ヴァイサーガ』・・・フルドライブ『水流爪牙』！！！」

炎「行くよ『残月』・・・『大次元断』！！！」

その行動より早く技を発動し、その二つの技に拮抗する事は無く、アリーナのシールドは砕け散ったのだった。

鈴「一夏っ！！」

一夏は私があゝの襲撃して来たISのビームを喰らいそうになった時に、私を庇ってそのビームを受けて大怪我をしてしまった。

私はそれを助けたけど、あのIS達に囲まれてそいつらはビームを撃つ手前までになっていたから．．．「もう駄目だ！！」って思っていた。

．．．そして私はその来るであろう痛みを備えて目を閉じていたが．．．その痛みは来なかった。

「なんで！？」と思い目を開けると、周りを赤いシールドが覆っていた．．．

誰が張ったのかは一瞬解らなかったけど、あのISの少し後ろにあのいつもはぼわわしてて、あんまり頼りになりそうに無い優しい笑顔をした風が、かなり怒った顔をしてIS達にこう告げたのだった．．．

風「ねえ．．．鉄屑共．．．壊される覚悟は．．．出来たかなっ！！」

鈴 Side out

風「ねえ．．．鉄屑共．．．壊される覚悟は．．．出来たかなっ！！」

その言葉と同時に風は手を前に突き出しこう唱えた．．．

風「守護領域．．．部分展開、そして『塵気楼』を解放し装備を破壊．．．そして『アルクオン』をスロット！！」

そう言つと風のISは、全身が黒と赤線しか入っていない．．．武器すらも持たぬ『羅刹機』と化した。

風「さあ．．．終焉へのカウントダウンの開始だよ．．．」
そう言うと同時に鈴と一夏を纏っていたシールド以外の『守護領域』
以外が砕け散ったのだった。

風「．．．『鬼神乱獣撃』！！」

その技が始まると、風のシールドエネルギーが削られていきながら、
『覇気』の龍が風の纏う『アルクオン』の拳から放たれていた。

その攻撃により、六機中三機を喰らいつくし、それ以降その機体は
動く事は無かった。

風「三機残っちゃったか．．．．．『覇皇空円脚』」

その技は、ただの蹴りの様に見えたが、一番近くに合った一機をも
の凄い威力で蹴ると、近くにいた機体に当たり、もの言わぬがらく
たと化したのであった。

風「最後の機か．．．地獄を見せてあげるよ．．．単一仕様能力
『双覇龍』！！」

その単一仕様能力を使用すると同時に赤い『覇龍』が二匹、『アル
クオン』の腕にまとわりついた。

風「行くよ．．．」

その言葉と同時に瞬時加速を使い敵の後ろに回り込むと裏拳をかま
し、その飛ばした方向に瞬時加速で追いつき叩き付けると、地上に
降り立ち叩き付けられ浮かんで来た敵に『覇龍』を纏った拳の雨を
降らせると離れて行った敵ISに小さな『覇龍』を叩き込み、手に
力を溜め『かめめは』の様なものを放つと『覇龍』を纏った蹴り
を放ち．．．こう言ったのだった。

風「奥義．．．『神覇・龍撃滅波！！』」
しんは・りゅうげきめいは

その攻撃が終わり敵ISが地面に落ちた後に、こう言ったのであつ

た。

風「仲間を傷つけられたら・・・僕は鬼神にでも、悪魔にでもなるよ・・・」

こうしてアリーナ内部での戦いは終了したのだった。

第二章 『クラス対抗戦 part 4 「襲撃 part 龍矢・炎」』

アリーナ内の戦いと同時に外に出た龍矢・炎の戦いも始まっていた。

龍矢「炎、半分は任せるぞ！」

炎「了解したっ！」

そう言っていると二人は半分ずつの二部隊に分けられていた敵の部隊に向かって行った。

炎 part

炎「さあ．．．壊される覚悟は出来てんだろうな！『残月』単一仕様能力『月影^{げっえい}』起動！！」

単一仕様能力が起動されると、『残月』が薄く黒い影の様なものに覆われ始めた。

炎「行くぜっ！！」

炎はそう言つと前に飛び出すのではなく．．．何故か大きく後ろに、だがかなりの上空まで上がって行った。

炎「『飛天無双斬』！！」

そして急降下をし、凄い勢いで敵の集団に突っ込んで行き、多くの敵を切り裂いて行った。

炎「二機残りやがったか．．．」

その言葉の通りに炎の目の前にはぎりぎりまで攻撃を避けたのである

う、片腕の無いISと、腕に傷を作っただけのISが浮かんでいた。そしてその二機はビームを撃つ為の準備を終えていたのか、炎に対してビームを撃つて来た。

．．．だが、

炎「俺はそこには居ない．．．」

ビームは炎の居たであろう場所を通り過ぎたがそこにあつたものは炎の残像だけだった。

炎「．．．『残月』を完全解放オルバージそして『烈火』、単一仕様能力『紅蓮』を起動．．．これで決める！！」

そう言つと遙か上空に飛び重剣を構え敵を見下ろしていたが、敵ISはその隙を逃すまいともう一度ビームエネルギーをチャージしていた。

炎「行くぜ！『ドラゴンダアアイブ』！！」

炎はその言葉と同時に龍の様な形をした炎と共に急降下を開始し、敵ISはビームのチャージが終わり、ビームを照射していたが、炎の纏っている龍の炎にかき消され炎の攻撃が直撃し、動かめがらくたと化したのだった。

炎「仲間を傷つけようとする奴には．．．容赦はしねえ．．．」

炎 part end

龍矢 part

龍矢はISの集団の前に立つと『ヴァイサーガ』を完全解放オルバージし黒騎士ブラック・ナイトの状態にし、剣を構えてこう言った。

龍矢「鉄屑共．．．俺にも俺の覚悟がある。もし、お前達の覚悟が俺の修羅を上回っているのなら．．．．．その力を持って証明しろ！！」

その言葉と同時に、龍矢は懐に剣を構えこう言ったのだった。

龍矢「『無に還す竜巻（零・ストーム）』！！！」

その言葉と共に剣から竜巻が発生し敵ISを包み込み、敵ISの動きを封じたのだった。

龍矢「．．．単一仕様能力起動『ソードエンペラー剣帝』！！！」

そう言うとき黒騎士の持つ剣は西洋剣ではなくあらゆる理から外れたとされる『ケルンバイター』になり、顔の部分には顔を覆うバイザーが装着された。

龍矢「燃え盛る劫火であろうとも．．．砕け散らすのみ！！！！」

『絶技・冥王剣』！！！」

そう言うとき空中に足場でもあったかの様に氷が広がり始め、敵のISを氷で覆い、そして龍矢は最後にこう告げた。

龍矢「．．．．．滅！！！」

そう言うとき敵を覆っていた氷が砕け、敵ISの機能はその一瞬により完全に凍結したのだった。

龍矢「．．．己の覚悟すら無い奴が、この俺に勝つ事は．．．永遠とわに無いだろう．．．」

そうして、IS学園に集結して来た謎のIS軍団は完全に鎮圧されたのだった。

龍矢
p
a
r
t
e
n
d

第二章 『襲撃の後』

クラス對抗戦の最中に乱入して来た敵ISをフルボッコにした後に、織斑先生と山田先生に三人は呼ばれ話をしていた。

千冬「今回の件に関してなんだが．．．礼を言わせてもらおう．．．」
龍矢「頭をあげてください織斑教諭、あれは俺たちがムカついたからやっただけです．．．」

千冬「そうか．．．．本題に入るぞ、お前達はあれが『無人機』だと知っていたのか？」

千冬は龍矢達が人が乗っているにしては容赦がなく、解析した結果は無人機だったのだが、戦闘中は無人機だと言う事は解っていないかった為の疑問だった。

龍矢「いえ、あのISには生体反応がなかったので．．．」

真耶「えっ！？そんなものが解るんですかっ!？」

炎「これは風兄が作ったシステムで人が居るか居ないかを確認する為のシステムですから．．．だよ、風兄？」

風「くくく」

千冬「起きるか馬鹿者（パシーン!!!）」

風「ふみやあ!？」

こんな時でも寝るのは風クオリティーである。

千冬「で、どうなんだ風？」

風「何の事ですか？」

真耶「風君が作った生体反応を示すシステムの事です」

風「あゝあれか。あれはねゝ紛争地帯とかで家に潰された子達が生きてたら助けやすいな」と思ったからなんだよね」

千冬「それならなぜ世界に公表しなかったんだ？」

千冬の疑問ももつともである。
なぜならこれがあるだけで多くの紛争地帯での救助活動が楽になるのだ。

風「こゝひょう仕様としたら束姉に色々頼まれて忘れてたから」

千冬「あいつのせいか・・・」

真耶「だったらこれを公表しませんか、風君？」

真耶の言う事は正しく、これを公表するだけで救える命が増えるのである。

風「んゝ・・・だったら」IS学園が作ったって事でお願ひします」

真耶「えっ、何ですか？」

風「これ以上目立ちたく無いんですよ」

千冬「・・・そうか、ISを操縦出来る男子、公にはなっていないが『五世代機』のISを製作、そしてこのプログラムを作ったとなれば他の国家が黙っていないからだな？」

風「大せゝかいです」

龍矢「まあ、国に狙われようと・・・俺たちと渚の四人で、正面から潰しますがね」

千冬「・・・出来るとは思いますが、するなよ」

龍矢「狙われなければしませんよ、織斑教諭」

千冬「まあ、この学園に居る限りは手出しはささんがな。それと、こちらが聞きたい事は以上だ」

龍矢「なら一夏の見舞いにも行きませんか？」

風「行くっ!!」

炎「風兄、同性の友達初めてだもんね・・・」

千冬「構わんのか？」

龍矢「構いませんよ、織斑教諭も一夏の事が心配なんでしょう？心配そうな顔をしていますよ」

千冬「なっ!?!」

千冬はポーカーフェイスに自信があつたのか、えらく驚いていた。

まあ、そんなこんなで保健室。

風「いつち〜!!」

龍矢「風、少しは落ち着け」

炎「初の男友達なんだからそりゃ心配だろうね」

千冬「織斑入るぞ」

そうして保健室に入ると、

篤「抜け駆けは禁止したはずだろう!!」

鈴「アンタだつて来てるじゃないのよ!!」

セシリア「お二人ともここは病室なのでですから落ち着いてください」

一夏「セシリアの言う通りだぞ」

渚「...一夏君、鈍感なんだね」

何故か修羅場つっていた。

炎「何この混沌?^{カオス}」

龍矢「話の内容からすると、大方鳳と篠ノ之が協定を結んだがそれを破っただけだろう」

風「あつ、おね〜ちゃんだ〜!!」

千冬「その二人は叩き出されたい様だな...」

篤・鈴『織斑先生っ!?!』

セシリア「りゅ、龍矢様!?!」

一夏「龍矢達もお見舞いに来てくれたのか、ありがとな」

渚「ふう君おいで〜」

風「ん〜(テクテク、ギョッ)」

・現在の状況

織斑先生が箒と鈴を叱っている。

セシリアが赤くなっておろおろしている。

一夏と龍矢が色々と話し込んでいる。

風が渚に抱き着いて、渚が風を撫でている。

そしてこの状況を見て炎はもう一度こう言うのだった。

炎「本当にさ．．．何この混沌^{カオス}！！」

第二章 e n d

第二章 『襲撃の後』 (後書き)

次回から第二章に入ります。その前におまげが入るかもしれません
が

第三章 『休日+転校生二人』

クラス対抗戦が中止になってからその次の休日、

龍矢は・・・

セシリア「龍矢様、この服なんてどうでしょう?」

龍矢「ふむ・・・色合的にもセシリアに似合っていると思うぞ
セシリア「そ、そうでしょうか!?!」

龍矢「ああ」

セシリアに誘われて買い物(と言うなのデート)に出かけていた。

炎は・・・

炎「ここが神社のはず・・・あ、あつたあつた!」

一人で町に出かけて町の探索中に、

渚「あゝ、炎君だゝ」

炎「あれっ、なぎ姉どうしたの?」

渚「お散歩してたの」

炎「そっか、じゃあどこかで昼飯でも食べない?」

渚「いいよ」

炎「じゃあ行こうか」

渚に途中で合い一緒に昼食に行った。

風は・・・

一夏「風ここが俺の友達ごほんだの五反田 弾だんって奴の家なんだ」
風「へ〜食堂もしてるんだ〜」
何故か一夏と一夏の友達の家に行っていた。

一夏「弾、来たぞ〜！」

弾「遅いぞい．．．ちか．．．」

風「初めまして〜黒焰 風って言います〜」

一夏「どうしたんだ、弾？」

弾「俺は五反田 弾と言います、付き合ってください、お願いしま
すー！」

挨拶して速攻で告白された風だった。

ちなみに現在の風の服装は．．．ゴスロリ、胸パッド、ネコ耳．．．
だったので女の子と間違われても仕方は無い。

風「僕は男だよ〜」

弾「．．．．．へっ？」

一夏「．．．ああ、風は私服がそれの上に胸パット入れてるらしい
からさ．．．ここに来るまでに何回通報されそうになったか．．．」

弾「嘘だ．．．こんなに可愛いのに男のはずが無い！！」

風「いつち〜ど〜したらいいの〜？」

一夏「．．．とりあえず、パットを除けば良いんじゃないか？」

風「恥ずかし〜から嫌〜」

一夏「それなら俺にどうしろと．．．」

弾「．．．とりあえず部屋に上がって行ってください！！」

風「だって〜」

一夏「なら、そうするか」

そうして部屋に行った後に、IS学園の生徒証を見せて信じてもら
ったのだった。

その後に、妹ごほんだの五反田 蘭らんちゃんに一夏の彼女と間違われたが、ま
た同じ事をして信じてもらったのだったが．．．

蘭「信じましたけど．．．何でこんなに肌がきれいなんですかつ！」
風「ん．．．おねちゃん譲り？」
一夏「何で疑問系なんだ？」
と、新たな争いの火種を生んだのだった。

休日も終わって月曜日の朝、クラスメイトのみんなはISスーツのカタログを見ながら談笑していた。
なぜカタログを見ながら話しているのかというと来週からスーツの申込期間が始まるからである。

一応みんな学園指定のスーツは持っているけど、今回申し込むスーツは個人に合わせた機能のスーツを買う為であるらしい。

本音「ね〜ね〜おりむ〜と、りゅ〜りゅ〜と、ふ〜ふ〜と、え〜君のISスーツってどこ製のの〜？」
いきなり話しかけて来た女の子は確か布のほとけ 本音ほんねさん、一夏はのほほんさんって呼んで居た気がするが．．．本名を覚えていないらしい。

一夏「あー、特注品だった。男のスーツが無いからどっかのラボが作ったらしいよ。確か元のやつはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

龍矢「俺達のは風の手作りだ、俺のは対G用加工がされている．．．そうでないと『アルト』の衝撃に耐えられないからな」

炎「俺のは対した事無いか、袖の長さが左右対称じゃない位で」
本音「じゃあ〜ふ〜ふ〜は〜？」

風「僕は今着てるやつだよ」

．．．その瞬間空気が止まった。

女子1「私にもそれ作ってくれない!!」

女子2「私も私もっ!!」

女子3「私もそれが良い!!」

風「ん〜．．．良いけど〜これ五十万円くらいするよ〜?」

その言葉によつてこれ以上の追求は無かったのだった。

そしてHRの時間になると最初に山田先生が爆弾を投下した。

真耶「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します!なんと二名です!」

女子達「ええええええっ!?!」

山田先生の転校生の紹介にクラスが一気にざわめく、どうやら誰も知らなかった様だ。

でもなんで分散させないでうちのクラスに集中させたのだろうか?

?「失礼します」

?「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

ドアが開いて二人が入るとざわめきがピタツと止まる。

一人は制服を軍服風に改造してある銀髪で眼帯をした女の子。

問題はもう一人の方だった．．．なぜならもう一人は．．．．．．男子だったのだから．．．

第三章 『金と銀の転校生』

クラスの大半（一夏以外の男子三人以外）は驚いていたが金髪の転校生は自己紹介を始めた。

？「こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いてフランスより転入をしました、シャルル・デュノアです。
不慣れた環境で皆様にはご迷惑をおかけしてしまうこともあるかと思いますが、よろしく願います」

その数秒後・・・

女子達『きゃあああああ！！』

女子1「男・・・！五人目！！」

女子2「しかもうちのクラス！」

女子3「しかも風きゅんと同じで守って上げたくなる様な！！」

女子4「このクラスで良かった！！」

と、半端じゃない声で女子達が叫び、色々な事を言っていた・・・
しかし、『風きゅん』で・・・

千冬「あー、騒ぐなお前達、静かにしろ」

真耶「み、皆さんお静かに、まだ自己紹介は終わってませんから」

！

？「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう一人の眼帯銀髪少女は無言で目を瞑って立っていた。

千冬「・・・・・・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここではそう呼ぶな、もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ・・・私のことは織斑先生と呼べ」

ラウラ「了解しました、ラウラ・ボーデヴィッツだ」
そのラウラと言われた少女はただ自分の名前だけを発するとそれ以外の事は喋らずに黙り込んだ。

ラウラ「．．．．．」

真耶「あ、あの、以上．．．ですか？」

ラウラ「以上だ」

山田先生が涙目である。

そうして男子が集まっている方向を向いてラウラは一番近くに居た龍矢にこう聞いた。

ラウラ「お前が織斑一夏か？」

龍矢「俺は黒焰 龍矢、一夏は隣だが．．．その一夏に向ける殺気を止めてもらおうか．．．風が本気でお前を殺しかねない．．．俺の二つ後ろの席を見てみる」

ラウラ「何だと？」

そう言われてラウラはその席を見ると．．．見た瞬間に殺気をラウラに送り、拳銃を構えている風が居た。

その姿と殺気を受けラウラは少し後ろに下がった時に風がこう言った。

風「僕の友達に手出したら．．．殺すよ？」

龍矢「．．．風、そろそろ殺気を止める、周りの奴が気絶しかけている」

そう言われると風は殺気を止めて、いつもの状態に戻ったのだった。風がいつもの状態に戻ってから少し時間が経った後に、

ラウラ「私は認めない．．．貴様があの人弟であるなど、認めるものか」

一夏「．．．お前に認められなくても俺は千冬姉の弟だ」

と、言うやり取りがあつたが、

千冬「あー．．．．．ゴホンゴホン！ではHRを終了する。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合し今日は二組と合同でIS模擬戦を行う、解散！」

織斑先生の言葉によつてこの場は収まり終了したのだった。

千冬「おい織斑、黒焰兄弟デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろ」

その言葉に了解の異を込めて傾いた四人だった。すると．．．

シャル「君たちが織斑君に黒焰君達？初めまして、僕は．．．」
一夏「ああ、いいから、とにかく移動が先だ、女子が着替え始めるから」

龍矢「さつさと移動するぞ、もうすぐ着替えが始まる」

炎「俺達も．．．風兄以外は社会的に死にたく無いしね．．．」

そんな事を言う炎だが、風の方を見ると渚の所に行つて自分で目隠しをし、渚が着替えるのを待つ様だった。

龍矢「いつもの事だ．．．早く行くぞ」

一夏「ほら、行くぞシャルル」
シャル「う、うん」

一夏はそう言つてシャルルの手を掴むと、シャルルの顔は何故か赤くなつていた。

炎「簡単に言うけど男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えないといけないから、実習のときはいつもこうだから慣れてくれな」
シャル「う、うん」

そう言つてアリーナの更衣室に向かう四人だったが．．．

女子1「ああつ！転校生発見！」

女子2「しかも、織斑君に龍矢君と炎君も一緒！」

女子3「いたつ！こつちよ」

女子4「者ども出合え出合えい！」

．．．一体此所はいつから武家屋敷になったのだろうか？

とまあ、そんな事を考えていると、いつの間にか他のクラスの女子達たちが四人を囲んでいた。

龍矢「ちつ！．．．一夏、炎此所からは別行動でアリーナに向かうぞ、シャルルは一夏と来い」

一夏・炎『了解！！』

シャル「え？えっ？」

龍矢がいきなり言った事に二人は了解し、一人は混乱していた。

龍矢「ならば．．．散開つ！！」

一夏 side

シャル「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

シャルルは状況が飲み込めてないみたいで困惑してるみたいだったから俺は理由を言った。

一夏「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

シャル「．．．．．？」

シャルルは意味がわかってなさそうだから補足しておこう。

一夏「ISを操縦できる男子って今のところ俺達だけだろ、だからみんな珍しがつてるんだよ」

シャル「あつ！．．．ああ、うん。そうだね」

一夏「それにアレだ、この学園の女子って男子と極端に接触が少な

いから、ウーパールーパー状態なんだよ」

シャルル「ウー……何？」

一夏「えーっとな……1980年代に日本で流行った珍獣のことだよ。たしかメキシコサラマンダーの幼形成熟態だった気がする」
まあ……うる覚えなんだけどな……

一夏「ま、これからよろしくな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。後の三人は後で紹介するから」

シャルル「うん、よろしく一夏。僕のことシャルルでいいよ」

一夏「わかった、シャルル」

おっと、いつの間にか校舎を出ていたようだ第二アリーナまであと少しだ。

一夏「よし、到着！」

龍矢「遅かったな一夏」

炎「早くしないと遅刻だよ……しかも織斑先生の出席簿アタック付きだし……」

先に着いていたらしく龍矢と炎は着替えを済ませて先に行こうとしていた。

一夏「うわ！マジで時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ、シャルル」

俺はそう言っただけで速攻で着替えようとシャツを脱いだら……

シャルル「わあっ!?!？」

と言っただけでシャルルが驚いていて顔を赤くしていた。

一夏「どうしたんだ……って、シャルルまだ着替えてないのか？早く着替えないと遅れるぞ。千冬姉は時間に厳しい人だから怒られるぞ」

シャル「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いて
て．．．．ね？」

一夏「???いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが．．

．．．って、シャルルはジロジロ見てるな」

シャル「み、見てない！別に見てないよ!？」

そんなやり取りや、世間話をシャルルとしているとアリーナに付いた
時には遅刻をしてしまい出席簿で俺だけ．．何故か俺だけ叩か
れたのだった。

．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．
．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．理不尽だ

一夏 side out

第三章 『授業にて』

千冬「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」
全員『はい!』

現在、グラウンドには一組と二組の生徒全員がいたのでいつもの倍の人数がいる。

箒と鈴が一夏を恨みがましい目で見ているが・・・自業自得だろう。
鈴が一夏を蹴ってるがどうせ一夏が変なこと考えてたんだろう。

千冬「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子がいることだしな・・・凰!オルコット!」
セシリア「なぜわたくしまで!？」

完全なとばっちりで戦闘するはめに・・・まあ専用機持ちなので仕方ないのだが。

千冬「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出るセシリア」だからってどうしてわたくしが・・・」

鈴「一夏のせいなのになんでアタシが・・・」
あー、ぼやいてるよ、ふたりとも・・・ん?千冬さんが何かを小声で言っていた。

えーっと・・・『あいつらに良い所を見せられるぞ』?

セシリア「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

鈴「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」
そう言っつて鈴達が言っつと・・・

『キィィィン・・・』

と言っつ音が聞こえて来たので上を見ると・・・何故かラファールに

乗った山田先生が一夏の方に落下して行った。

真耶「あああーっ！ど、どいてくださいっ！」

『ドカーン！』

と言っ音と共に一夏にぶつかっただった。

一夏はその時にどういう事なのか山田先生を押し倒して胸を揉んでいた。

．．．．．一夏は死んだな。

その後『女性の敵だ』とか言われてセシリアと鈴の連携によって一夏は死んだと思ったら、山田先生が止めになりかけた鈴の『双天牙月』の先にライフルの弾を当て撃ち落としていた。

その後セシリア、鈴タツグvs山田先生の戦闘になり結果は山田先生の勝利によって終わった。

その後、織斑先生のお言葉により、

千冬「さて、これで諸君にも教員の實力は理解できただろう、以後

は敬意を持つて接するように．．．それと、龍矢、炎」

龍矢・炎『はい』

千冬「どちらかが専用機持ち達と1対5の勝負をしろ」

専用機持ち『えっ!?!?』

龍矢「構わない、炎俺が出る」

炎「どうぞどうぞ」

流石に一夏はこの事に不満があるのか意見をしていた。

一夏「千冬．．．織斑先生、流石に龍矢でも1対5は無茶だっつて

龍矢「一夏、転校生二人の實力は知らんが、お前達三人なら．．．

瞬殺だ」

風「りゅーやー、二人の實力を足してもおねーちゃん一人で二十分位だよ。むしろ一太刀浴びせれたら合格位だね」

一夏「．．．そこまで言われて引き下がれるか！絶対一太刀．．．
いや、勝つてやるからな！！」

ラウラ「そこだけは同意してやるう織斑 一夏、私とて『黒ウサギ
シユヴァルツェ・ハーゼ
部隊』の隊長だからな．．．その余裕を叩き潰してくれる．．．！
！」

シャル「流石に僕も此所まで言われたら引き下がれないかな．．．
セシリア「龍矢様と勝負．．．龍矢様と勝負．．．」

鈴「龍矢相手ならさっさとけりをつけないとヤバいわね．．．」

龍矢「ふっ．．．この『剣帝』に簡単に簡単に勝てると思うなよ」

そして次の話にくのだった．．．

炎「次の話って何さっ!？」

第三章 『授業にて 龍矢vs専用機持ち五人』

空中に浮かぶ『黒騎士』とそれに対する五機、一夏は刀、セシリアはライフル、鈴は連結剣、シャルルはアサルトライフル、ラウラはライフルを構えていたが、龍矢は武器を構えずに一枚の『カード』を持っていただけだった。

千冬「全員準備は良いな．．．開始！！」
そして戦いは始まったのだった。

o t h e r s i d e

龍矢「『ヴァイサーガ』をスロットし、解放！！」

龍矢はそれにより漆黒のマントと、黒を基調とした西洋剣を握った。

一夏「喰らえっ！！！」

鈴「喰らいなさい！！！」

その瞬間を狙い一夏と鈴が近接攻撃を、シャルルは実弾、セシリアとラウラはビーム弾を放っていたが．．．

龍矢「遅いつ！！！」

そう言うのと近接攻撃を剣で簡単に止め、ビームはマントで止め実弾は全て最小限の動きで避けたのだった。

五人『なっ！？』

流石にこの連携は避けられないだろうと考えていたが、その考えは甘く全てを避けたり、防いだりしていた。

特にビームをマントで消した事にセシリアとラウラは驚きを隠せな
いでいたが．．．

龍矢「動きを止めていると俺には勝てないぞ？」

セシリア・ラウラ『．．．っ！！』

龍矢は一瞬にして瞬時加速で近づき、こう告げた．．．

龍矢「受けてみよ．．．荒ぶる炎の渦を．．．『鬼炎斬』！！」

その攻撃を二人は避けきれずともに喰らってしまった、シールドエネルギーを半分以上．．．約三分の一程まで削られていた。

一夏「後ろがから空きだぞっ！」

鈴「これはおまけよっ！」

シャル「これならどうかっ」

一夏は単一仕様能力『零落白夜』を使った一撃を、鈴は『龍砲』を使った衝撃砲を、シャルルは『盾殺し』の異名を持つシールド・ピアーズの『灰色の鱗殻』グノー・スケールを使って攻撃をしたが．．．

龍矢「タイミングを考えないと．．．俺には届かんぞ？」

そう言うのと瞬時加速で避け、三人の攻撃は龍矢に当たらずに、その前に居たセシリアとラウラに当たり、二人のシールドエネルギーは零となった。

龍矢「俺ではなく、仲間に当たった様だが．．．少しは連携と言うものを考えてはみないのか？．．．まあ、俺には関係ないか．．．

単一仕様能力『シールドエンペラー剣帝』起動！！」

龍矢は単一仕様能力を起動し、『ケルンバイター』と『五大剣』の二刀流となって、

龍矢「．．．『秘奥義・冥王鬼炎斬』」

と告げると、一夏達を『冥王剣』を使い氷で覆い、その氷ごと『鬼炎斬』で切り裂くと、一夏達のシールドエネルギーは零になってい

た。

こうしてこの勝負は龍矢の完勝にて幕を下ろしたのだった。

o t h e r s i d e o u t

炎「うわぁ．．．あそこであれはえげつ無いよ、龍兄」

風「やっぱり相手にならなかったね」

渚「流石龍君だね」

千冬「流石に此所まで差があるとはな．．．」

風「思ってたなかったんですか」

千冬「流石にな」

風「でも」
「ヴァイサーガ」で戦わなかったから手は抜いてますよ」

千冬「．．．なんだと？」

風「『ヴァイサーガ』の単一仕様能力『蒼龍演舞』はビーム攻撃を自分のシールドエネルギーに変換しながらあの『五大剣』に『零落白夜』を着けた様なものだから瞬殺なんですよ」

千冬「．．．まるで化け物だな」

風「気にしたら負けなのですよ」
「織斑せんせ」

そうしてこの日の授業は終了して行くのであった。

第三章 『 シャルル の正体 』

例の模擬戦が終わった後、

一夏「痛たた．．．龍矢強すぎるだろ．．．」

セシリア「良いじゃないですか．．．わたくしなんか一夏さん達に落とされましたのよ．．．」

ラウラ「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

鈴「流石龍矢ね．．．五対一なのに圧倒的すぎるわよ」

シャル「はははは．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

と感想はバラバラだったが、龍矢は、

龍矢「風が俺達の．．．いや、俺の為に作ってくれた機体だからな、やられるとしてもただでやられる気は無い．．．むしろ負ける気等無いがな」

シャル「へえ．．．そうだったんだ．．．それよりも風って誰？」

一夏「あのゴスロリの服を着てる．．．朝、本気で俺の為に切れてくれた娘だよ」

シャル「えっ！？あの娘って男の子だったの！？」

鈴「その気持ち解るわよ．．．並の女子より可愛いからねあいつは．．．．．」

シャル「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

その時の風をみるシャルの目は少し悲しみと後悔の入り交じった様な目だったが、それに気づいたのはただ一人だった。

その日の昼休み、一夏達と龍矢、炎は屋上に弁当を食べに、風と渚、そしてシャルは風達の部屋へ行っていた。

風「シャルル、そこに座っててね」

シャル「お、お邪魔します」

渚「……………」

風「はいお茶」

シャル「あ、ありがとう」

風「おね、ちゃん、何でシャルルを呼んだの？」

渚「シャルル君、何で授業の時ふう君の方を見て悲しそうな目をしてたの？」

シャル「っ！……ぼ、僕そんな目をしてたかな？」

渚「ええ、後悔や悲しみが織混じった様な目をしていたわ……」

シャル「……………」

風「おね、ちゃん、おね、ちゃんにも言っただけ……シャルルは多分女の子だよ……」

渚「えっ!？」

シャル「っ！ど、どうしてそう思ったの？」

風「シャルルっておっぱい結構大きいんじゃない？それを押さえつけてると結構動く時に違和感があるくらいには……それに時々なんだけど行動が女の子っぽいんだよね……」

シャル「……………」

渚「……………どうしてか教えてくれないかな？」

風「今日の授業の後に龍矢達が着替えてたら、後から来て着替える時に一夏がシャルルの方に行っただけ、その時に男子同士で着替えてたらそこまで慌てる事無いのもの凄く慌てたから……かな」

渚「シャルル君……私からの質問なんだけど……本当なの？」

渚「……聞いた数分後、シャルルの口から答えが返って来た……」

シャル「ははは……うん僕は本当は女なんだ……でもまさかこんなに早くばれるとは思わなかったなあ……」

渚「……………どうしてこんな事をしてたの？」

シャル「実は実家の方からの指示でね『織斑一夏と新たに現れた三人の男子のISの機体データを収集して来い』って言われたんだ．．

渚「それでふう君がISを作ったって龍矢君が言ってたのを聞いてふう君をだまさないと行けなかったから、あんなに悲しい目をしていたのね．．でもどうしてそんな事を？」

シャル「僕はね、父と愛人との間に生まれた子なんだよ」

渚「っ!？」

風「．．．．．」

シャル「引き取られたのが二年前、ちょうどお母さんが亡くなったときにねデュノアの家の人が来たの。それで色々と検査していくうちにIS適正が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね。

父と話したのは二回くらい、会話は数回くらいかな。普段は別荘で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ『この泥棒猫の娘が!』ってね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、戸惑わなかったのにな．．

「．

シャルルは言いたくも無いであろう事を喋ってくれていた．．．だが、それを聞いていた渚と風は、無意識のうちにシャルルを引き寄せて優しく．．．とても優しく抱きしめていた。

その時に渚は悲しみから涙を流し、風はかなりの怒りもあつたが、それ以上にシャルルがとても悲しそうに喋っている事への謝罪の涙を流していた。

渚「．．．ごめんね、こんな事聞いちゃって本当にごめんね．．．」
風「(ギョツ)ごめんね．．．ごめんね．．．」

シャル「ふ、二人とも泣かないですよ．．．これは僕のせき．．．」

風「シャルルの責任じゃないよう．．．シャルルが悪い事なんて、一つも．．．一つも無いよう．．．」

渚「ふう君の言う通りなの。あなたは悪く無い．．．悪いのはこんな事をさせているあなたのお父さんよ」

シャル「どうして．．．？どうして二人は、こんなにも．．．こんなにも優しくしてくれるの．．．？」

渚「私たちはね、親に捨てられたの．．．龍君も炎君も．．．だからだと思つての、どうしても悲しんでいる人を放っておけないのは．．．

．私たちがみたいに悲しんでほしく無いから．．．」

シャル「あ．．．」

シャルルは何かを思い出した様に声を漏らした。

渚「だからもう、無理に笑わないで。泣いても良いのよ．．．ここには私たちしかいないから」

シャル「．．．．．うえ、うええーん!!」

シャルルはその言葉に．．．渚達の優しさに耐えきれずに、渚の胸に顔を埋めて泣き始めた。渚はシャルルが泣き止むまで黙って頭を撫で続けるのだった．．．

第三章 『……シャルル……の本当の名前』（前書き）

今回の話は、若干ノリで書きちゃいました。

……でも、良い話に仕上がったと、自分では思っています。

それでは本編へどうぞ。

第三章 『シャルルの本当の名前』

あれから数十分後、昼休みは終わったが織斑先生に理由を話し．．．
と言つよりも二人（シャルルと風）は目が真つ赤なので午後の授業
は休んでいた．．．

しかし、転校初日で授業を休むって．．．

シャル「ご、ゴメンね渚さん、服汚しちゃって」

渚「ううん、大丈夫よ。落ちついた、シャルルさん？」

シャル「う、うん、ありがとう、渚さん」

渚「ふう君、泣きつかれて寝ちゃったんだ．．．シャルルさん、ふ
う君をベッドに寝かせてあげて」

シャル「わかったよ」

そして風をベッドに寝かせようとしてシャルルが近づくと．．．

風「にゅう．．．（ギョツ）」

シャル「きゃあ!？」

渚「ふふふ．．．やっぱり近づいて抱き上げようとする抱き着い
ちやうんだ．．．ふう君お出で」

風「みゃう．．．（ギョツ）」

シャル「．．．何で？」

渚「抱き上げようとした人に抱き着くだけだね、私がお出でつて
言つと絶対私の方に来るの。それだけ安心するんでしょね．．．」

シャル「そうなんだ．．．それよりもさっきの続きがあるから話す
ね．．．」

渚「シャルルさん、無理に話さなくても良いのよ？」

シャル「ううん、話すよ。ちゃんと渚さん達には話したいんだ」

シャルルの顔は先程みたいに曇ってはおらず、晴れ晴れとしていた。

渚「．．．なら、話してもらっても良いかしら？」

シャル「うん．．．僕が本邸に行ってから少し経ったときにね、デユノア社が経営危機に陥ったんだ」

渚「．．．聞いた事があるわ、欧州連合の『イグニツション・プラン』にデユノア社が外されたって．．．」

シャル「そう、デユノア社は欧州連合統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されたんだ。この計画に必要なのは第三世代型ISの開発、デユノア社はね量産型ISシェアは世界第三位なんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後期、第三世代の開発には時間とデータが不足していて、なかなか形にならないんだ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカット、次のトライアルで選ばれなかった場合、援助は全面カットされて、その上ISの開発許可を剥奪するってことになったの」

渚「じゃあシャルルさんの性別を偽らせた理由って．．．」

シャル「僕が男装してまでIS学園に入学したのには二つ理由があるの、一つは広告塔として。そしてもう一つは．．．龍矢達と一夏この四人の使用機体データを取るため．．．あの人は僕に皆のデータを盗んで来いって言ったんだよ！！」

その時のシャルルの顔は怒りに満ちていた．．．

シャル「とまあ、こんなところかな。でも渚と風にはれちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は、潰れるか他企業の傘下にはいるだろうね。まあ、僕にはどうでもいいことかな．．．」

シャルルは淡々と話すのを渚はただ黙って聞いていた。

シャル「なんだか泣いて、話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう渚さん。それと、今までを嘘付いていてごめんなさい．．．」

シャルルは渚に深く頭を下げていた。だが渚は親のために頭を下げ

るシャルルのその姿に納得が言っていないかった。

渚「．．．シャルルさんはそれで良いの？」

シャルル「．．．．．えっ？」

渚「親のこと関係ないの、シャルルさんはそれでいいの！？シャルル・デュノア個人としてはそれでいいのっ！？」

シャルル「な、渚さん？」

渚はシャルルの肩を掴んで声を荒げていた。シャルルは戸惑いと怯えの表情をしているけど渚は止めずに渚は言葉を続けていた。

渚「確かに生んでくれた親は大事よ。でも、それでいいの！？私は許せない、親だからってそんなこと言っていていいはずないわよ、誰にだって自分の道を選ぶ権利があるのよ！」

シャルル「い、痛いよ、渚．．．ど、どうしたの？変だよ？」

渚「さつきも言ったでしょう．．．私たちは親に捨てられたって．．．」

シャルル「うん．．．」

渚「捨てられた理由はその時は解らなかつたわ、でも皆親の事が大好きだったの．．．ふう君が後で調べただけだね？私たちの親は多額の借金をしていたの、多分なんだけどね、私たちが巻き込まれない様にだつたんだと思うわ．．．」

シャルル「．．．．．」

渚「だからこそ！私はあなたの父親を許せないのよ！！」

シャルル「ありがとう渚．．．でも時間の問題じゃないかな、フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、代表候補生をおろされて、よくて牢屋かな？」

渚「シャルルさんはそれで良いの？」

シャルル「良いも悪いもないよ、僕には選ぶ権利はないから、仕方ないよ」

シャルルがそう言うと渚は微笑んでこう言ったのだった．．．

渚「ここに居たら良いのよ。『特記事項第二十一・本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意しない場合、それらの外的介入は原則として許されないものとする』これを使えば最低三年はシャルルさんはフランスに戻らないですむのよ、その間に何か方法を考えましょう？」

シャル「渚さん．．．よく五十五個もある特記事項を覚えてたね？」

渚「秘密なんだけどね？私本当は候補生じゃなくてね日本代表なの」

シャル「そうなんだ、ふふっ．．．」

シャルルはやつと笑った。先程までの作った笑顔では無く、年相応の女の子の笑顔だった。

渚「それにね？シャルルさんが良いなら私たちが家族になっても良いのよ？龍君も炎君も絶対賛成してくれるから」

シャル「えっ!？」

渚「その場合はフランス国籍も代表候補生でも無くなっちゃうけれど．．．シャルルさんが良いならね？」

シャル「．．．．．。だったら渚さんの事を『お姉さん』って呼んでも良いですか？」

渚「ええ、構わないわ」

シャル「ありがとう．．．『お姉さん』．．．私の本当の名前、教えておきますね．．．私の本当の名前はシャルロット、これがお母さんのくれた名前なんだ．．．」

渚「どういたしましたして．．．これからはシャルロットちゃん．．．いえ、シャルちゃんって呼ぶわね．．．」

そうしてこの後、部屋からは悲しい雰囲気は無くなったのであった。

第三章 『シャルル』の本当の名前（後書き）

炎「前回から俺の出番が無いんだけど……」

龍矢「気にするな……前は俺も台詞は一つだけだ……」

シャルを家族に……シャルを悲しませたく無いがゆえに、渚さんの『家族になる』宣言でした

この話だけでなく、他の話等のご意見、感想から、訂正箇所批判まで幅広くお待ちしております

第三章 『とある昼食の風景』

渚と風とシャルルが話し合いをしていた時、屋上ではこんな事があった……

龍矢達は一夏に誘われて屋上にいた。

どうやらさっきの実習の時に箒が一夏を誘ったらしいのだが、一夏は余計な（箒にとって）気を回したらしくいつものメンバー＋龍矢、炎という大人数になってしまっていたのだった。

その時に炎は、

炎「（一夏に箒の気持ちを気づかせるのは至難の業だね……）」
と考えていた。

龍矢と炎は風手作りの弁当を、鈴はタッパに入った酢豚を、セシリアはバスケットに入ったサンドイッチを、箒は弁当箱を二つ持って来ていたが、一夏は何故か何も持って来ていなかった。

鈴「あれっ？龍矢達も弁当なの？」

龍矢「風がわざわざ作ってくれているんだ、食ってやらんと申し訳ないだろう？」

炎「まあ、風兄の作る料理って美味いから俺的には嬉しいけどね」

一夏「ああ……俺がクラス代表になったときのパーティーでもお菓子を作ってくれたな……あれは本気で美味かったしな」

箒「ああ、あれは美味しかった……つい食べ過ぎてしまったがな……」

セシリア「確かにあれは美味しかったですわ……体重が3kg増えましたけど……」

鈴「へえ……そんなに美味しいんだ……龍矢少し寄越しなさい」
龍矢「別に少し位なら構わんが……いつそのこと弁当を少しづつ

分け合わんか？」

この龍矢の提案に、

第「うむ、それも良いな（またあの料理が食べられるとは．．．）」
セシリア「ええ、わたくしも構いませんわよ（風さんの料理がまた食べられますわ．．．）」

鈴「別に構わないわよ（それなら遠慮なく食べられるし．．．）」
炎「俺も別に構わないかな（他の人の美味しそうだし．．．）」
一夏「それで良いんじゃないか？（俺も何か持って来たら良かった．．．）」

龍矢「なら、食おうか」

全員『いただきます!!』

昼食が始まって最初に手が付いたのは風の作った弁当だった。

ちなみに中身は．．．

炊き込みご飯 ポテトサラダ 煮込みハンバーグ三個 麻婆豆腐
自家製プリン

だった．．．ていうか何故にプリン？

風の弁当を食べた方々の反応は．．．

第「くっ．．．どうやったらここまで美味しくなるんだ．．．」
セシリア「可愛い上に料理までお上手なんて卑怯ですわ．．．」
鈴「あいつ本当に女なんじゃないの!？」

一夏「うん、やっぱり美味しいな」

との感想だった。

と、その時．．．

炎「グハッ!？（バタン、ビクビクッ）」

一夏「どうしたんだ炎!？」

炎「一夏、サンドイッチには、気を、付ける（ガクッ）」

一夏「炎．．．？えー！ー！ー！ん！！」

龍矢「サンドイッチ？この事が．．．（ひよいつ、パク）．．．
．．これを、作ったのは？」

セシリア「わたくしですわ、お口に合いましたか？」

龍矢「（スツ）食ってみる．．．」

セシリア「わ、解りましたわ．．．（ひよいつ、パクツ）%\$”#
%”\$&#;!&#;!?”

龍矢「今度風にでも料理を教えてください」

セシリア「りよ、了解ですわ．．．．（せつかく龍矢様の為に
作りましたのに失敗している何て．．．）」

そう失敗した事にセシリアが悲しんでいると．．．

龍矢「一夏、箒、鈴．．．これは俺が貰うぞ？」

三人「えっ!？」

龍矢「せつかく作ってくれたんだ．．．捨てたら、もったいないだ
ろう？」

セシリア「りゆ、龍矢様．．．」

そして、龍矢は全てを平らげ、その他の者達も弁当を食べ終わり．．

．気絶した炎を保健室に連れて行ってこの日の放課後は終了したの
であつた．．．

第三章 『デュノア社へ行く』(未遂)

渚とシャルロットの話が終わってから三十分後、風が目を覚ました。

風「ふにゃ〜」

渚「ふう君起きたんだ〜」

風「ふにゅ〜」

シャル「風って凄く猫っぽいんだね」

渚「どちらかと言えば〜猫だね〜」

風「おね〜ちゃんおはよ〜」

渚「風君おはよう」

シャル「風、おはよう」

風「.....おはよ〜」

渚「シャルちゃん居る事忘れてたでしょ〜」

風「(こくん)」

渚「何してたかは覚えてるの〜?」

風「今思い出したよ〜.....さあデュノア社を潰そつか〜」

シャル「うん.....え

っ!?!」

風の言った言葉にシャルは一瞬頭が着いて行かなかった。

シャル「ど、どうしてそんな事を?」

風「だって〜しゃ〜ちゃんを道具として使うなんて〜.....

人間として最低だよ〜?」

シャル「そこは否定しないけど.....」

風「と言う訳で潰してきます」

渚「寄り道しちゃ駄目だよ〜」

シャル「お姉さん、そこは止めようよ!!--」

風「お姉さん?」

風はシャルロットが渚に対して『お姉さん』と呼んでいるのかを疑問に思ったが、

渚「シャルちゃんがね〜」お姉さんって呼んでも良いですか?』つて聞いて来たから〜いいよって言ったの〜」
渚がその疑問に付いて答えたのだった。

風「ならよけいに潰してくる」

シャル「なんでっ!？」

シャルのその疑問は最もだった。

風「だってしゃ〜ちゃんがおね〜ちゃんをお姉さんって呼ぶなら家族みたいなものでしょ?家族みたいな人を道具として扱うなんて．．．殺しても殺し足りないよ?」

シャル「殺しちや駄目だから!！」

風「え〜．．．じゃあ、ハッキングでもしてしゃ〜ちゃんをフランス国籍から国籍無くして僕たちと同じ自由国籍にするのは?．．．後デュノア社と完全に縁を切って僕たちの家族にするけど．．．」
シャル「まだそれなら．．．」

風「ならそうしよ(ぽすっ、カタカタ)」

何とも言えないシャルロットだったが、あの親と完全に縁を切る事には何も未練は無い様だった。

．．．それにしても何故パソコンを弄る時でさえ渚の膝の上に座るのだろうか?

風「(カタカタ)そ〜言えばしゃ〜ちゃん」

シャル「どうしたの風?」

風「(カタカタ)しゃ〜ちゃんの持つてる『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』ね〜．．．多分フランスに返さないと行けなくなっちゃうんだ〜」

シャル「まあ、それはそうだよね・・・」
シャルロットは今の『ラファール』に思い入れがあるらしくとても悲しそうにしていたが・・・

風「僕の作ったく第三世代のISを送って『ラファール』を返さな
いか」『ラファール』を返して僕の作ったISに乗るか・・・ど
つちが良い？ちなみに『ラファール』を元にして作った奴なんだよ
ね」

渚「そ～言えばあつたね」

シャル「えっ!?!・・・・・・・・・じゃ、
じゃあ風が作ったのに乗って良いかな？」

風「じゃあしゃ～ちゃんが持ってたの返してもいい？」

シャル「う、うん・・・」

風「じゃあそう言う事で織斑せんせ～にも話しておくね」（カタカ
タカタカタ）・・・これでしゅ～りよ」

シャル「速くないっ!?!」

シャルがそう言ったのも仕方が無いだろう、何せ風が行動を始めてからまだ十分程度しか経っていないのだ。

風「そ～なのかな？」

シャル「絶対速いよ・・・」

風「まあこれで僕たちは家族だから・・・何も遠慮しなくていいか
らね？」

シャル「・・・うん、ありがとう・・・風お兄ちゃん、渚お姉ちゃ
ん」

風「ふふっ、よろしくね、しゃ～ちゃん」

渚「シャルちゃんよろしくね」

こうしてシャルロットとの出会いは終了しシャルロットは無事にデ
ュノア社から救われたのであった・・・

第三章 『疾風の白騎士』

シャルロットが家族になった次の日、シャルロットに渡す為のISを準備して、風達五人＋ は第三アリーナに居た。

風「龍矢く織斑先生は呼んだから解るけどさく．．．．．何でいつちく達が居るの？」

風はこの日の放課後に第三アリーナを関係者以外立ち入り禁止にして貰う様に織斑先生に頼んでいたからこそその言葉だった。

一夏「いや、龍矢達と模擬戦しようとしたらさ『今日は用事があるから無理だ』って言ったからな着いて来たんだけど．．．駄目だったか？」

千冬「お前はストーカーかっ！！（バシッ！）」

一夏「グハッ!？」

千冬「全く．．．お前は人の都合をなんだと思っているんだ．．．」

一夏「ごめん、千冬姉．．．」

千冬「（パシッ！）織斑先生だ．．．そしてここは今から関係者以外立ち入り禁止だ、さっさと出て行け」

一夏「じゃあ何でシャルルが居るのさ？」

炎「普通に考えたら関係者だからだっつて．．．」

龍矢「織斑教諭もこんな弟を持って大変ですね．．．」

千冬「全くだ．．．」

龍矢・千冬『はあっ．．．』

炎・一夏『何でさっ！！』

風「でもねいつちく、関係者じゃないんだからさく．．．さっさと出ようよ」

渚「一夏君、速く出てくれないとこっちも始められないんだよ？」

風と渚からこう一夏に告げると、

一夏「うっ．．．どうしても駄目か？」

風「駄目」

千冬「そう言う事だ、私も時間が少ない早く出て行け」

一夏「解りました．．．」

そう言つて一夏は第三アリーナを出て行ったのだつた。

千冬「で、関係者以外を立ち入り禁止にした理由はなんだ？」

風「昨日しゃくちゃん．．．シャルロットを僕たちの家族にしたのは知ってますよね？」

千冬「ああ、その事は覚えている」

風「それによつてしゃくちゃんのISをフランス政府へ返還する事になつて．．．それでしゃくちゃんに僕の作ったISを渡すんです」

千冬「．．．．なるほど、それによつての確認やどの国がそのISの所有権を持つか等か．．．」

風「いいえ違います。しゃくちゃんは僕たちと同じ自由国籍を持っている様にしましたので．．．織斑先生にはどれだけの質力等があるかの確認です」

風はそこまで言つたとそれに加えて、

風「一夏を守る為の力を織斑先生には知って頂いた方が良く思つたんですよ」

千冬「そうか．．．」

その言葉に千冬は納得し今からする事をしっかりと記憶しているのだつた。

風「さあしゃくちゃん、これが僕の作ったく、今からしゃくちゃんのものになるISだよ」

そう言つと風はそのISにかかつていた布を取り払つた。

その布の下から出て来たISは、白とオレンジが織り混じつた『天

使』の様な機体だった。

シャル「……風お兄ちゃん、これが、僕のIS?」

風「うん、これがしゃくちゃんにあげる機体、この機体の名はね

ヴァイスリッター・ラファール

『疾風の白騎士』って言うんだ」

シャル「『ヴァイスリッター・ラファール』……」

風「この機体は第三世代のISで、おねくちゃんの前の愛用機だったんだ」

シャル「お姉ちゃんのこと?」

渚「ええ、この機体も凄かったんだよ……でもふう君、これって壊れたんじゃないか?」

渚は二年程前まではこの機体を愛用していたが、不慮の事故に遭い壊れていたのだったが……

風「束姉に手伝ってもらって直しました」

龍矢「この事は俺も初耳なんだが……」

炎「俺もだよ……」

渚「何で教えてくれなかったの?」

風「おねくちゃんが『紫電』に乗ってたからもう使わないかな?と思ってたから……時々ちゃんと僕が乗ってメンテナンスはしてるんだよ?……しかもしゃくちゃんの為に色も変えたし……」

渚「そうだったんだ」

そして一度この話題を終わらせたのであった。

第三章 『疾風の白騎士』（後書き）

今回は『シャルvs渚』でお送りしたいと思います

ちなみに『疾風の白騎士』ヴァイスリッター・ラファールの見た目は『スパロボOG無限のフロンティア』の『ヴァイスリッター・アーベント』の元の色が白とオレンジ色にした様な機体です

このISについてはまた別の時に説明したいと思います

いじょ切裂でした

第三章 『渚vsシャルロット』

あれから数分経ち、アリーナ上空には・・・『現日本代表』の渚と『元フランス代表候補』のシャルロットが浮かんでいた。

風「しゃくちゃんはフォーマットとフッティングは終了してるから
く・・・二人とも本気でやってね」

渚「解ったよ」

シャル「うん、了解」

千冬「両者とも準備は良いな？・・・・・・・・・・・・・・・・
初めっ！！」

その言葉によつて二人の戦いは始まるのだった。

o t h e r s i d e

渚「行くわよ！」

シャル「行くよっ！」

そう言うと渚は右手にシヨットガン、左手にガンブレードを呼び出し、対するシャルは両手にマシンガンを呼び出した。

千冬「ほう・・・高速武器切り替え（ラピッド・スイッチ）か・・・」

龍矢「ええ・・・それにしてもシャルロットまでそれを使えるとは・・・」

炎「なかなか面白いね、今回は・・・」

風「うん・・・何せ武器の展開によつて勝負が決まるからね・・・」

それを考えるとおねくちゃんのほうが有利だね」

．．．もし片方だけが高速武器切り替えを使えるならば、弾切れを同時に起こしてもその片方が一瞬で違う武器を呼び出し決着をつける事も出来るが、今回は互いにその技術を持っているので、何の武器を呼び出すか、相手が何の武器を出すか等の先読みによって勝負を決する事になるのだ。

だが渚は日本代表でありシャルロットよりも戦闘経験が多く、実力も圧倒的に上なのだった。

渚「ハッ！！」

渚はショットガンで牽制をしつつ、ガンブレードの弾をチャージして居た。

それに対しシャルロットは、

シャル「クツ！！」

マシンガンによって渚の撃って来た弾を撃ち落としたり避けたりしながら攻撃をしているが、

シャル「（何で全く当たらないのさっ！?!）」

シャルロットの攻撃は渚にはかすりもせず、少しずつ焦り始めていた。

渚「チャージ完了！．．．はあっ！！」

渚はチャージの完了したガンブレードでシャルロットに向かって砲撃を行った。

シャル「うわあ！？」

シャルロットはその攻撃を避けきれずに砲撃を喰らってしまい、シールドエネルギーは半分程削られていた。

その上、渚はその間に高速武器切り替えによって今まで出していた武器をしまい、ライフルを取り出し照準を合わせ．．．

渚「行っけ〜！」

無情にもその引き金を引いた。

シャル「えっ！？何でミサイルがライフルから飛んで来るのさっ！？」

．．．実はこのライフルは風が渚の為に作った特殊仕様のライフルで、実弾以外にも、ミサイル、手榴弾、刀剣等の様々な物が打ち出せる様な仕組みになっていたが、シャルロットはそれを知らない為驚いていた。

だがしつかりとミサイルに照準を合わせ、落としていたのは流石だろう．．．だが意識がミサイルに言っていた隙を渚は逃さずに後ろに回っており、『雷切』を装備し、単一仕様能力である『雷光』を起動させ．．．

渚「これで終わりよ．．．『雷刃一閃』．．．」

そう言つて技を喰らわせると、シャルロットのシールドエネルギーは零になったが．．．

シャル「痛たた．．．．．それでもお姉さん、最後に少しですけどダメージは与えましたよ？」

その言葉の通りに、シャルロットは『雷刃一閃』が当たる直前にグレネードを呼び出しそれを自分と渚の前に投げ、互いにダメージを少し受けたのだった。

渚「むう〜！次は一回も当たらないんだからね〜！！」

渚は勝つて喜ぶのではなく、一回だがダメージを喰らった事を悔しがっていた。

o t h e r s i d e o u t

風「ふふっ．．．おね〜ちゃんが悔しがるの久しぶりに見たよ〜

・可愛いな〜おね〜ちゃん？」

千冬「そうなのか？」

風「はい〜一年以上悔しがってるのを見ませんでしたから〜」

千冬「まあ、こうやって悔しがったりするからこそ強くなるんだ

・今は散々嘆けば良いさ．．．」

風「．．．そ〜何ですか〜．．．」

そうしてこの模擬戦は終了した。

第三章 『デュノア社へ行く』(現実)』

渚とシャルロットの模擬戦があつた次の日、一夏にこう聞かれた。

一夏「なあ風、結局昨日のは何だったんだ？」

風「禁則事項なので、お答えする事は出来ません。もし聞きたいのであれば、織斑先生に模擬戦で勝つてからにしましょう」

一夏「ぐっ……そこをなんとか」

意地でも聞こうとする一夏に、

龍矢「一夏、それ以上は止めておけ……後ろで渚が睨んでるぞ」
渚「むう〜〜！」

渚は風と話をしようとしていたが、その時に一夏が風に話しかけたので渚は一夏を睨んでいた……
まあ睨んではいるがそこまで怖くないのだが……

一夏「じゃあ龍矢が教えてくれよ」

龍矢「無理だ」

一夏は風から対象を変え龍矢に聞こうとしたが一言で断られた。

一夏「じゃあ炎は……」

龍矢「あいつはあいつで今日は理由があつて休んでいる」

一夏は今度は炎に聞こうとしたが炎は不在だった。

一夏「だつたらシャルルなら……」

龍矢「あいつも今日は用事があるから休んでいる」

一夏は結局誰にも聞けずにこの日の授業は始まったのだった。

……余談だが、一夏はこの日出席簿で十回以上叩かれ、頭
がかなり腫れていたとかいないとか……

一方その頃、炎とシャルルは．．．

炎「さて．．．この会社なんだよね？」

シャル「うん、この会社だよ．．．．．」

二人はフランスに来ており、とある会社の前に居た。

炎「ここが『デュノア社』か．．．」

シャル「うん．．．ここが前までの僕が居た場所だよ．．．」

炎「．．．まあ、まさかジャンケンになって誰が潰しに行くかを決める事になるとは．．．」

シャル「しかも負けた人じゃなくて勝った人が行くって聞いたときは本当にびつくりしたよ．．．普通は『負けた人が行くんだよ？』ってお姉さんから聞いたんだもん」

炎「仕方ない、皆シャルの為に動きたかったんだからさ」

シャル「うん．．．本当にありがとうね」

炎「ああ．．．．．ならさっさと社長に合わせて頂こうかな？」

シャル「．．．うん行こっか、炎」

そう言うと、二人はデュノア社の中へと歩みを進めた。

シャル「（コンコン）失礼します」

炎「邪魔するよ」

そう言つて二人は社長室の扉を開けた。

社長「お前か．．．何をしに帰つて来た？」

その言葉にシャルロットは答えずに、変わりに炎が答えた。

炎「『アンタとは何も関係のない赤の他人になりました、アンタの命令は聞きません』って事を言いに来たんだよ糞野郎」

社長「何だとっ!？」

シャル「今言った事は本当の事です．．．今までこの『ラファール』にはお世話になったけど．．．これは返します」

そう言うとシャルは自分のポケットから待機状態の『ラファール』を取り出し机の上に置いた。

社長「．．．そんな事を聞くと思ってるのか？」

炎「知るか糞野郎、とつくに経歴上でもアンタとの親子の縁は切れ
て俺達の家族になってんだよ!！」

社長「なっ!？(カタカタツ)．．．．．．一体いつの間に
．．．」

炎「もしこれでもアンタがシャルをアンタの物だと言い張るなら．．
．(チャキツ)アンタの事とこの会社をこの世から消したやるよ．．

．この紅の劍聖くれないのけんせいがな!！」
そう炎が言うと社長は黙り何も言わなくなった。

炎「俺が言いたいののはそれだけだ．．．行くぞシャル」

シャル「あ、うん．．．．．．今までありがとうございました」
そうシャルロットがこれまでの事にお礼を言い、二人はこの場を立
ち去り社長だけがこの部屋に佇んでいたのだった。

炎達は外に出ると炎は龍矢に電話をかけた。

炎「ああ龍兄?．．．．．．ああ、終わったよ今からお土産でも買
ってシャルと帰るから．．．ああちよつと待ってね．．．シャル、
龍兄が変わってって」

シャル「あ、うん．．．．．．うん、ちゃんと行って来たよ．．
少し悲しいとは思ったけど．．．うん．．．ありがとう．．．うん、
じゃあ切るね(プツッ)」

炎「龍兄は何て？」

シャル「『今回の事にちゃんと決別は出来たか』って事と、『悲しいのなら早く帰って来い』って……やっぱり皆優しいよね……」
その言葉に炎は、

炎「まあ、皆シャルの事を……いや、家族の事を大切に考えてる家族なんだから、俺達からしたら当たり前前様になってるだけだよ……」

シャル「うん……そんな事が当たり前に出来るからこそ優しいんだよ……」

そのシャルの言葉に炎は、

炎「そっか……そうだな」

と、言うとシャルは……

シャル「うん、そうだよ。……僕もそんな風になれるかな？」

と言い、それに対して炎は……

炎「龍兄なら絶対こう言うよ『当たり前だ……何せ俺達は家族だからな』って」

シャル「……うん……そうだね！」

そう炎が言うとシャルロツトは向日葵の様な笑みでそう言ったのだ
った……

第三章 『ぶち切れた風』

炎がデュノア社に四人を代表して脅しをかけたに行った次の日の放課後、

風「いつちう達は今日は第三アリーナだよね？」

渚「うん、さつきそんな事を言ってたよ」

龍矢「・・・風、そろそろシャルロットのISは他の奴に見せても構わないか？」

炎「確かにそろそろ学年別トーナメントがあるしね」

風「しゃくちゃん、そろそろいいよ・・・皆の前で『ヴァイスリッター』を使っても」

シャル「うん、じゃあ早速使ってみるね」

そんな事を話しながら第三アリーナに着くと・・・そこでは一方的な戦闘が行われていた。

鈴の操る『甲龍』とセシリアの操る『ブルー・ティアーズ』がラウラの乗る『シユヴァルツァ・レーゲン』によって装甲はぼろぼろになり、搭乗者もぼろぼろの状態になっていた。

風「・・・こ・・・す・・・」

渚「ふう君？」

その光景を見た瞬間に風の中の何かが切れた。

風「殺す!!」

その言葉を発した瞬間、風は『神風』を起動しアリーナのシールドをぶち破り、ラウラへと向かって行った。

風「死ねっ!!」

ラウラ「なっ!?!」

ラウラは『神風』の速度に反応する事が出来ずに風の持つていた槍『風槍・神風』の攻撃をまともに喰らいアーリーナの壁に叩き付けられた。

風「確かお前が転入して来た時にこう言ったよね？・・・『僕の友達に手出したら殺すよ？』って・・・その約束通り・・・お前を殺すっ！！」

その言葉にラウラはただ・・・

ラウラ「・・・（ガタガタ）」

軍人という事すらも忘れただ震える事しか出来なかった。

風「行くよっ！！単一仕様能力『神空』起動！！」
単一仕様能力を起動させた瞬間、風の姿が消えた。

ラウラ「ぐあっ!?!」

・・・風の姿が消えてから数秒後、ラウラがいきなり吹き飛ばされ、その後に『ドゴンツ!』と言う打撃音が遅れて聞こえて来た。
・・・そして、最初の攻撃と今の攻撃の二回だけで、ラウラのワールドエネルギーは満タンの状態から残り二桁まで減らされていた。

風「・・・止めだ」

その言葉の後に風は遙か上空に現れ・・・何も持っていない状態で、弓に矢をつがえる様な姿を取った。

風「『風弓・烈風』・・・」

その言葉を告げると、何も無かった所から風を圧縮した弓と、風を圧縮しさらにそれをもう一段階圧縮した矢を十本以上構えていた・・・

風「じゃあ．．．．．さよなら．．．」

風は矢から手を離し、全てをラウラに向かって発射した。

ラウラ「くっ!!」

ラウラはAICを発動しその矢を止めようとしたが．．．．．
．．．．．その矢は止まる事は無く当たり『ガキーン!!』と言う音がしてラウラの体を貫く．．．

炎「流石にやり過ぎだつて．．．」

龍矢「今回はやり過ぎだ」

事は無かった。

龍矢達はIS装甲が厚い『アルトアイゼン・リーゼ』と『烈火』を展開し、龍矢は『参式斬艦刀』を、炎は『ダイナフォッシル』を楯代わりに構えて風の攻撃を防いでいた。

風「二人とも．．．邪魔．．．」

渚「(チャキツ)ふう君、今回はふう君が悪いよ」

シャル「(チャキツ)．．．ごめんね風、少し．．．眠っててね．．．」

そう言う渚は手に構えていたアサルトライフル『閃光』と、シャルの構えていたロングライフル『パルチザンランチャー』が火を吹き、風のシールドエネルギーを零にした。

そして風のシールドエネルギーが零になってすぐに織斑先生が来たが．．．

千冬「遅かったか．．．」

と言い、その後．．．

千冬「．．．今から学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁止する、解散!!」

そしてその後、

千冬「龍矢、炎、どうしてこうなったのか後で説明しに来い」

龍矢「今からでも大丈夫ですが・・・」

炎「俺はあそこで気絶してるラウラとあそこでぼろぼろになってる二人を保健室に連れて行ったらすぐに行きます」

千冬「・・・そうか」

そして炎は三人を運び、龍矢と共に織斑先生のへ行き、事情を説明したのだった・・・

第三章 『ぶち切れた風』（後書き）

色々と設定がぶっ飛んでますが、気にしないでください。・・ちなみに言うところ設定上では後付け装備の方に、『斬艦刀』は入っています。

今日から九月七日の水曜日の終わりまで、風達オリジナルキャラクターと一夏達のメインキャラクター達の為のオリジナル武器を募集します。

もしアイディアがあったら、どんどん送って来てください。

もし送ってくださる場合は、

武器の名前（例） パルチザンランチャー

武器の種類（例） ロングライフル

武器の特性（例） 実弾とビーム弾を使い分ける事が出来る

誰に使ってほしいか（例） シャルロット

を書いて感想を送ってください。

ただし、あまりにも「キャラに合わないっ!!」とか、「チート過ぎるっ!!」と言う武器は採用しません。が、それ以外の武器は、ほとんど採用するので、どしどし送ってください。

以上、切裂でした。

第三章 『トーナメントのペア』

風が暴走した日の夕方の保健室では．．．

一夏「なあ．．．一体何があつたんだ？」

シャル「ボーデヴィツヒさんがオルコットさんと鳳さんをISの戦闘で殺しかけてて．．．」

渚「それを見たふう君が怒ってラウラちゃんを殺しかけたから、私たち二人と龍君と炎君で止めたのよ．．．」

篤「そして止めた時に風が気絶、その後に保健室へ運んだ、と言う事ですか．．．」

渚「そう言う事なのよ．．．」

その時、

風「．．．．．うん」

渚「ふう君起きたの!？」

風「すうすう」

一夏「寝言みたいだな．．．」

シャル「そうみたいだね」

渚「むう．．．」

その時、廊下から『ドタドタッ!』っという何かの音が近づいて来た。

そしてその後に勢いよく保健室の扉が開かれた。

女子1「織斑君!」

女子2「デュノア君!」

女子3「風君!」

女子達『これ!!!』

そして、数十人の女子達が男子三人（本当は二名）に向かって一斉

に紙を差し出した。

一夏「何々．．．『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは．．．』」

女子1「そこまでいいから!!」

女子2「兎に角、お願いします!!」

女子達『お願いします!!』

その言葉に一夏達は、

渚「ふう君は絶対駄目〜!!」

シャル「ぼ、僕は龍n．．．龍矢と組む予定だから．．．（後でお願ひしないと．．．）」

一夏「お、俺は．．．そうだ第一緒に組もうぜ!!」
第「わ、私とかっ!?!」

と、三者三様の対応だった。

．．．ちなみに女子達は、

女子1「あゝあ．．．駄目だった〜．．．」

女子2「シャルル君は龍矢君とか〜．．．まあ、他の娘に取られるよりはましか〜．．．」

女子3「篠ノ之さん良いな〜」

等と、色々な反応があった。

ちなみに一夏は鈴に、

鈴「私と組みなさいよ!!」

等と質問攻めの様なものをされていたのだった。

．．．後でシャルロットは龍矢に事情を説明し、ペアにはなる事が

出来たらしい。

第三章 『一回戦』（前書き）

学校が始まり、なおかつ土曜日と日曜日に陸上の新人戦があったため、最近は全く更新する事が出来ませんでした。

忙しかったため、この小説を読んでくださっている方には、ご迷惑をおかけしたと、深く反省をしております。

それでは本編へどうぞ。

第三章 『一回戦』

日は飛んで学年別のタッグトーナメントの日に、一人だけ機嫌が悪い者が居た。

風「ごめんね〜炎〜（泣）」

炎「……………別に気にしてない」

龍矢「……………ちなみにだが、風も今聞いたはずだよな？」

風と炎は学年別トーナメントがタッグトーナメントになった事を知らずに居た為、炎はペアの相手がおらず抽選でペアの相手が決まる事となっていたのだ。（風は渚がペアになる為の登録用紙を出していた）

風「ごめんね……………ごめんね……………」

炎「はあ……………まあ、ここまで今さっき聞いたばかりで罪の無い風兄が誤ってくれてるから……………機嫌は直すよ。」

そうじゃないと風兄にももの凄く悪い気がする……………」

風「……………もう怒ってない？」

炎「……………流石に罪も無い風兄に謝られたらね……………」

そして時は立ち、第一回戦が始まろうとしていた。

龍矢「さて……………行くかシャル」

シャル「うん、行こうか龍兄」

そう言つと二人は、

龍矢「『ブラック・ナイト黒騎士』、『アルトアイゼン・リーゼ』をスロット状態で起動」

シャル「行くよ『疾風の白騎士』」

互いにISを起動しアリーナへと飛び立って行った。

龍矢達の一回戦の相手は、名前も知らない生徒の二人組だった。

龍矢「相手は．．．大して気にならないと言いたいが、俺は誰であるうと手加減はしない」

シャル「何でなの？」

龍矢「全力で相手をする事は相手に対する最低限．．．いや、俺からしたら最高の礼儀だ」

シャル「そうなんだ．．．」

そんな他愛の無い会話が終わるのを見計らってかは知らないが、その話が終わると同時に試合開始の音が鳴り響いたのだった。

風「うわ〜一方的な殺戮だね〜」

一夏「可愛い顔してそんな事を言うのはどうかと思うぞ、風」

風の言った通りに龍矢とシャルのチームワークに対戦相手の二人は翻弄され、シールドエネルギーは段々と減って行っていた。

そして危なげも無く第一回戦は龍矢とシャルのペアが完勝したのだった。

第三章 『一回戦』（後書き）

前書きにも書いた様に、時間が無く荒々しく書いたので、短くて駄文なので、とても申し訳ないと思っております。

出来る限り数日中には更新をしようと思っておりますので、この駄目駄目な作者の作品を、読んでくださる事を、誠に嬉しく思っております。

いじょ、切裂でした。

第三章 『一回戦part2』 (前書き)

数日中に更新するとか言いながら、ほぼ一週間かかってしまって済みません。orz

遅れた理由は、後書きに書きますので、と、とりあえず、本編へどうぞ。(汗)

第三章 『一回戦 part 2』

渚「じゃあ〜行こっか、ふう君」

風「うん〜」

龍矢とシャルのペアの試合が終わり、次の試合は風と渚のペアの試合だった。

風「（ギユツ）ん〜（スリスリ）．．．でも〜少しだけおね〜ちゃん分ほきゅ〜」

渚「も〜仕方ないな〜」

その行動を見ていた者達は心の中で、

一夏「（いつもただけど仲良いよな〜あの兄妹）」

篤「（わ、私もいつかは一夏と．．．）」

セシリア「（わたくしも出来る事なら龍矢様と．．．）」

鈴「（今度一夏に頼んでみようかしら．．．）」

シャル「（僕ならお姉ちゃんに抱き着いても風には怒られないよね？）」

龍矢「（この甘い空間をどうしたら良いんだ．．．）」

炎「（．．．そう言えば俺のペアって誰だ？）」

仲が良いと思う者が一人、自分の思い人に同じ様な事をして貰いたい者が三人、姉に甘えようとした者が一人、この空気をどうにかしようとする者が一人、全く関係ない事を考えている者が一人と言う状態だった。

．．．ちなみに言うと、言うまでもないが風と渚のペアは圧倒的な強さを見せつけ、相手チームに完勝したのであった。

そして、二試合程飛び、次は炎の試合となった。

炎「さて、行ってこようかな？」

風「頑張ってる？」

一夏「そう言えば炎は誰とペアを組んだんだ？」

炎「知らない．．．はあっ!？」

龍矢「どうした？」

炎「はあ．．．よりによってまためんどくさい奴だよ．．．」

そう言っただけを見た電光掲示板には

一夏・篝『なつ／何っ!？』

『黒焰 炎 & amp; ラウラ・ボーデヴィツヒ VS 織斑

一夏 & amp; 篠ノ之 篝』

と書かれていたのだった。

第三章 『一回戦 part 2』（後書き）

どうも〜切裂です〜

今回更新が遅れた理由なのですが．．．また作者の気まぐれで〜新しい小説を書こうかな〜？とか思いました〜その小説の基本的な設定等を考えていたのです〜

ちなみに書くこうと考えているのは〜皆さん知っている人も多いと思います〜

『遊戯王GX』の小説のクロス作品で〜、会社名『ホエール』さんの出したゲームの〜

『俺の彼女はヒトでなし』という〜、ヒロインが全員人外という中々ヒロイン設定が面白いゲームをクロスさせてみようかな〜と考えております〜

ただし問題がありまして〜．．．全く持ってタイトルが決まらないんです〜（泣）

今回〜投稿が遅れた理由の七割程度は〜これなんですよね〜．．．なので〜もしこれを見た方で〜良いタイトル名があったら教えてください〜ださい〜駄目作者なので〜中々思いつかないんです〜

なので〜もし良いタイトル名があったら感想の方へ送ってください〜以上切裂でした〜

第三章 『一回戦 parts 3』

ラウラ「おい」

炎「……………」

ラウラ「聞いているのかつ!!」

炎「…集中してるから静かにしてもらえるかな」

ラウラ「ふん、そんな事は関係ない、どうせ私一人で片をつけるのだからな」

炎「…なら俺はお前がどうなるうと手助けはしないぞ?」

ラウラ「ふつ、物わがりの良い奴だ」

…炎とラウラのタッグの相性は最悪の様だった。

一方、一夏と篝のペアは…

一夏「篝、あいつとは一対一でやらせてくれ」

篝「…勝つ自信があるのか?」

一夏「ああ、とある秘策があるんだ」

篝「どんな作戦何だ?」

一夏「実はな……………」

その言葉を聞いた篝は若干あきれ顔になりながら、

篝「…本当にあいつは私たちと同じ学生なのか?」

一夏「まあ、どっちかって言うと科学者だしな……………」

そんな事を話していると、

アナウンス「選手の方々は準備が整い次第アリーナへお入りください」

一夏「じゃあ行くぞ篝」

篝「ああ、頑張ろう一夏」

と、相性はかなりいい様だった。

とまあ．．．そんなこんなで戦いが始まるのであった。

試合が始まる前に、一夏とラウラはアリーナの上空にてとある会話を
行っていた。

ラウラ「ふん、逃げずに来た様だな」

一夏「逃げる？それはお前の事じゃないのか？」

ラウラ「ほう．．．そんなに死にたい様だな」

一夏「『力』の使い方．．．そして意味すらも解らない奴には言われ
たくないな」

ラウラ「っ！良いだろうお前は徹底的に潰してやるっ」

その言葉の数秒後試合開始の合図が鳴ると．．．

二人「行くぞ！！」

二人は同時に飛び出し勝負が始まったのだった。

o t h e r s i d e

試合開始とともに動き出した二人は互いの武器．．．『雪片』とプ
ラズマ手刀で切り掛かった。

一夏「くっ．．．!!」

ラウラ「ちっ．．．!!」

一夏はラウラの繰り出す猛攻をギリギリで防ぎ切り、ラウラは思っ
た以上に攻撃が入らない事にいらついていた。

「一夏」(「……ギリギリだがまだ龍矢達に比べたら防ぎきれない!」)
「ラウラ」(「くっ……何故この私の攻撃がこいつ程度の奴に一度も当たらないっ!」)
その打ち合いを数分続けるうちに、ラウラの集中力が切れ始めたのか、攻撃が少しずつだが大振りになって来た。

「一夏はその大振りになった攻撃を避けると『白式』の単一仕様能力である『零落白夜』を起動して反撃を繰り出した。

「一夏」はあっ!!」

「ラウラ」なっ!?!」

ラウラは攻撃が大振りになっていた為に避けられた事によって体勢を僅かにだが崩し、一夏は攻撃をなんとか当てる事が出来た。

だがこの一撃によりラウラの『シユヴァルツァ・レーゲン』のシールドエネルギーは三分の一以上削られたのだった。

………ちなみに残っている炎と箒はと言つと……

炎「一夏も中々やる様にはなつたね」

箒「ああ、龍矢達やお前との訓練のおかげだろう」

炎「箒さん達の訓練もあるんだけどね……」

箒「そうか………ちなみに私たちは勝負しなくても大丈夫なのか?」

炎「大丈夫でしょ、一夏がどこまで成長したかも見たいし」

箒「……まあ、それもそうだな」

そんな感じで戦う事をせずに一夏とラウラの戦いを傍観しているの
だった。

o t h e r s i d e o u t

第三章 『一回戦 part 4』

Other side

一夏とラウラは互いに持てる全力、『零落白夜』と『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー A I C』を使い死闘を続けていた。

．．．そして一夏とラウラの戦闘が十分以上続く中、一夏とラウラにはお互いに違つ覚悟を心の中にずっと持っていた。

一夏には傷つけられた鈴やセシリア等の仲間の為にも負けられないと言つ覚悟

ラウラにはドイツで教官をしていた千冬に自分の行っていた事が間違ひではなくその事を示す為にも勝たなければならない覚悟

この二人が持つ覚悟はとても強く、生半可な覚悟で戦えば確実に負けるであろう戦いだつた。

その為数十分の戦いにも関わらず、二人の体力も、シールドエネルギーも互いに一割を切っている様な状態だつた。

一夏「はあはあ．．．お前もそろそろ、限界か？」

ラウラ「はあはあ．．．お前の方が、限界じゃないのか？」

一夏「言ってる、俺にはまだ、とっておきが、あるんだよ」

ラウラ「ふん、口だけで無ければ良いのだからっ！！」

その言葉を皮切りに、ラウラは距離をつめ自身のISの固有技能である『A I C』に意識を集中させ、一夏の動きを止めようとしますが、

一夏はそれを読んでいたかの様にその場を離れて手に持っていた『雪片』を仕舞った。

ラウラ「なっ!?!」

ラウラはその事に驚いていた。

．．．だがそれは当たり前だろう。『白式』の装備はラウラが知っている限りは『雪片』のみなのだから．．．

そう、ラウラ．．．いや、風と箒と一夏以外が知っている限りは．．．

一夏「行くぜっ!」『白雪』!?!」

その他大勢『なっ!?!』

一夏が呼び出した武器に多くの者が驚いていた。

そしてその武器は．．．

「突撃槍．．．」

そう誰かが呟くと一夏は、

一夏「さあ、残ってるエネルギー全てを全開にして戦おうぜ、ラウラッ!?!」

その槍を掲げて一夏はこう叫ぶのであった。

一夏「エネルギー全・開っ!?!」

o t h e r s i d e o u t

第三章 『一回戦 part 4』 (後書き)

名前 『白雪』

形状 ランス 突撃槍

説明 某武装で錬金な漫画の青汁少年の持っている様な武器に似ているが、槍の持ち手付近にブースターが着いている物
だがこの武器はただ切ったり刺したりする以外の方法もあるらしいが？

第三章 『一回戦 part 5』

龍矢 side

一夏が『雪片』以外の武装を使ったと言う事は．．．確実に風だな。

龍矢「一体どうやって『白式』に他の武装を積んだんだ？」

風「ん、無理矢理、拡張領域を広げただけだよ」

シャル「．．．それってどうなのさ」

風「気にしちゃ負けなのだ」

その答えがとんでもないと思ったが、気にしない事にするか．．．

龍矢 side out

other side

一夏が『白雪』を出した事に会場に居た殆どの者が驚いていた。そしてそれは対戦相手であるラウラも同様だった。

ラウラ「な、何だその武器はっ!？」

一夏「ん?見ての通り．．．俺の新しい武器さっ!!!」

一夏はそう言つと『白雪』を構えて突撃を開始した。

ラウラ「ふん!そんな突撃、この『AIC』の前にかかれば無力だ!」

そう言つて『AIC』を起動させようとした時に、

一夏「喰らうかよっ!!」

一夏は『白雪』に着いているブースターを使い、突撃をいきなり別の方向へと変更した。

ラウラ「なっ!?!」

ラウラはいきなりの事に驚いてしまい数秒の間動きが止めてしまった。

だが、この数秒が命取りとなった。

一夏はその数秒の間に上空へと飛び、空中で動きを止めていた。

一夏「喰らえっ!」

そう言うと一夏は『白雪』を上段に構え、ラウラに向かって思いっきり投げたのだった。

ラウラ「くっ!」

ラウラはいきなり的事だったが今度は冷静に判断し『白雪』が『AIC』の領域に入りそうになれば止めるつもりだったが・・・

一夏「これで俺の勝ちだ!」

ラウラの背後には瞬時加速で近づき『雪片』を構え、単一仕様能力である『零落白夜』を起動している一夏が居たのだった。

ラウラは『白雪』に気を取られていた為、一夏の実在を忘れていたのだった。

一夏「喰らえっ!!」

その言葉と同時に『雪片』を振り下ろしラウラの集中を切らせた時に、ラウラに先ほど投げていた『白雪』が当たってラウラのシールドエネルギーを零にしこの勝負に勝ったかのように思われたが・・・

まだこの戦いは続いていたのであった。

o t h e r s i d e o u t

ラウラ s i d e

ラウラ「（こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・！）」

確かに相手の力量を見誤った、それは間違えようのないミスだ。しかし、それでも

ラウラ「（私は負けられない！負けるわけにはいかない・・・！）」
ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・それが私の名前、識別上の記号。
一番最初に付けられた記号は 遺伝子強化試験体C 007。
人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

暗い・・・暗い闇の中に私は居た。

ただ戦いの為だけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。
知っているのはいかにして人体攻撃をするかという知識。

分かっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であった。

性能面において、最高レベルを記録し続けた・・・世界最高の兵器

ISが生まれるまでは。

ISの適合性向上の為に行われた処置『ヴォーダン・オージエ』に

よって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージエ』 疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。

そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳』と呼ぶ。

危険性は全くない、理論上では、不適合も起きない筈だった。

この処置によつて私の左目は金色へと変質し、常に稼動状態のままカット出来ない制御不能へと陥った。

だがこの『事故』により私は、部隊の中でもIS訓練において後れを取る事となる。

そして何時しかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。

私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。

それが教官との・・・織斑千冬との出会いだった。

千冬「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。・・・何せ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。

特別私だけに訓練を課したということはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はIS専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にならな

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に 憧れた。
その強さに、その凜々しさに、その堂々とした様に、自らを信じる
姿に、焦がれた。

ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そえ思つてからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つ
けては話にいった。

いや、話など出来なくても良かった。

ただ側に居るだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所
からふつふつと力が沸いて来るのが感じられた。

それは、『勇氣』という感情に近いらしい。

そんな力が有ったからだろうか。私はある日訊いてみた。

ラウラ「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれます
か？」

その時 ああ、その時だ、あの人が、鬼のような厳しさを持つ教
官が、僅かに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情に何故だか心がちくりとしたのを覚えている。

千冬「私には弟が居る」

ラウラ「弟・・・ですか」

千冬「あいつを見ていると、分かる時がある・・・強さとはどうい
うものなのか、その先には何があるのかをな」

ラウラ「・・・良く分かりません」

千冬「今はそれで良いのさ。・・・そうだな、何時か日本に来るこ
とが有るなら会ってみると良い。」

・・・ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに 「

優しい笑み、何処か気恥ずかしそうな表情、それは

ラウラ「（それは、違う、私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）」
だから 許せない、教官にそんな表情をさせる存在が。そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない、認めるわけにはいかない。
だから

ラウラ「（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で完膚無きまでに叩き伏せると！）」
ならば こんなところで負けるわけにはいかない。
あの男は、あれは、まだ動いているのだ。
動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。

そうだ、その為には

ラウラ「（力が、欲しい）」

ドクン．．．と、私の奥底で何かがつごめく。

そして、そいつは言った。

「願うか．．．？汝、自らの変革を望むか．．．？より強い力を欲するか．．．？」
言うまでもない．．．力が有るのなら、それを得られるのなら、私など 空っぽの私など、何から何までくれてやる！
だから、力を．．．比類無き最強を、唯一無二の絶対を 私によこせ！

Damage Level．．．．D．．
Mind Condition．．．．．Uplift．
Certification．．．．．Clear．

《 Valkyrie Trace System 》
.
b
o
o
t
.
.
.
.
.
.

ラウラ「あああああっ！！！！」
そうして私は意識を手放したのだった。

ラウラ side out

第三章 『一回戦 part 6』

ラウラ「あああああつ!!!」

ラウラが大声を上げ、ラウラのISである『シュヴァルツァ・レーゲン』の装甲がスライムのように溶け、『シュヴァルツァ・レーゲン』とは違う形のISとなって現れた。

炎「何なのさ、一体・・・」

炎がそう呟くと同時に、

風『炎、聞こえる?』

炎「感度良好、風兄あれって何さ?」

風『隔壁が閉まったから一瞬しか見えなかったけど・・・おそらくは「ヴァルキリートレースシステム」だね』

炎「何さそれ?」

風『過去のIS世界大会の部門受賞者のデータを「トレースしたシステム」の事だよ。』

・・・世界的に開発は禁止されたシステムなんだけどね』
そう風が言つと、

炎「で、ISにかなりの愛着のある風兄は何を所望で?」

風『東姉風に言つと、「あんな不細工で未完成で不完全な物は・・・ぶっ壊して」かな?』

炎「ふう・・・了解したよ風兄」

炎はそう言つと、

炎「篝さん・・・危険だから一夏を一回離脱させるから、救出したら動かないでね。」

もし何かあつたら、オープン回線あたりで報告してくれたら良いか

ら

第「わ、解った．．．．．炎」

炎「何かな？」

第「一夏の事を、頼む」

炎「任されたよ」

そうして炎は一夏とラウラの元へと飛んで行った。

o t h e r s i d e

ラウラのISが『ヴァルキリートレースシステム』によって変形した時に持っていた刀を見て一夏は怒りを覚えた。
なぜならば、

一夏「何だよ．．．何でアイツが『雪片』を．．．千冬姉だけの刀を持ってんだよ!!」

一夏はそう言うと、こちらに向かってきたラウラと戦闘になったが．．．

一夏「くっ、シールドエネルギーが．．．」

先ほどの戦闘によって殆どのエネルギーを使っていた為、エネルギーが全くと言う程残っていなかった。

そして何より、一夏自体の体力も限界に近かった為、切り掛かられ鏢迫り合いになっていた状態から、一瞬だけ．．．ほんの一瞬気を抜いただけで一夏の握っていた『雪片式型』は弾き飛ばされてしまい、そしてその時に『白式』を起動するだけのエネルギーも無くなり『白式』は強制解除されてしまった。

そして目の前のラウラは武装が解けた一夏に対して、その手に持つ『雪片』を振りかぶった。

その時一夏は心の中で、

一夏「（俺は誰も護れないまま死んじまうのか？）」

と、思っていたが、いつまでたつても『雪片』が振り下ろされる事は無かった。

なぜなら・・・

炎「はあ・・・勇氣と無謀は全く違うんだよ一夏」

と、良いながら『残月』を起動し『雪片』を『暁丸』で止めていたからだった。

炎「一夏、お前が怒ってるのは解った。でもエネルギーも無い、満身創痍で戦えもし無い、だったら俺も風兄に頼まれてあれを壊すから・・・今回は我慢しといて篝さんの所に行つといて」

炎は言いたい事を言うだけ言つと、ラウラを一夏から出来るだけ離し、ラウラとの戦闘を開始した。

炎「さて、お前もお前で色々と問題があつた様だし・・・一撃で決めてやるよ！」

その言葉をきっかけにラウラも動き炎に切り掛かったが、

炎「風兄や龍兄に比べると、圧倒的に遅い・・・

喰らえ・・・『終の太刀・絶影』」

ついのたち・せつえい

炎はその言葉を残すと、瞬時加速を使ったのか、いつの間にかラウラの後ろに移動していて、太刀を粒子分解したと同時にラウラを覆っていた黒い装甲が縦に二つに切れて、中からラウラが立つ力も無いのかそのまま誰もいない方向へ倒れかけたが、

炎「やれやれ、世話のかかる姫さんだこつて・・・まあ、今回だけ

だぞこんな事は
「
そうしてラウラを支えてやり、
今回のVTS事件は幕を閉じたのだ
った。」

第三章 『一回戦 part 6』（後書き）

約一週間ぶりの切裂です

少し前に宣言していた様に、新たに『遊戯王GX』の小説、『俺と決闘者はヒトでなし』を、投稿し始めました

それにより、出来る限り更新はしますが、二週間に一回や、一ヶ月に一回程度の更新になるかもしれません

出来る限り、一週間に一回ペースで更新したいと思っておりますので、これからも応援等をしてください

いじょ、切裂でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5106u/>

ISに乗りし者達の物語

2011年11月16日22時25分発行